

カラス林・三つ塚

長野県上伊那郡宮田村
カラス林・三つ塚緊急発掘調査報告書

1977

南信土地改良事務所
宮田村教育委員会

カラス林・三つ塚

長野県上伊那郡宮田村

カラス林・三つ塚緊急発掘調査報告書

1977

南信土地改良事務所

宮田村教育委員会

序

我が村の主峰、中央アルプス駒ヶ岳に源を発する太田切川の、左岸段丘上の駒ヶ原台地西方に古くから三つ塚と呼ばれる古墳がある。この古墳を中心に、西に三つ塚遺跡、東に鳥林遺跡が並んでいる。今回この地域が圃場整備事業の実施区域となり、これらの遺跡の現状保存が至難となつたので、発掘による記録保存に決定した。

三つ塚古墳は、東塚、中塚、西塚の三基からなり、東塚については良好な姿で保存されており、これは永久保存とするために、基盤整備事業の除外地区とした。しかし西塚と中塚については農耕等により破壊されており原形をとめず、そのために地権者の同意を得ることが出来ず、やむなく発掘調査を実施した。

詳細については本報告書に譲るが、鳥林、三つ塚両遺跡は共に縄文時代中期の住居址や遺物が数多く検出された。

また三つ塚古墳については、西塚、中塚共に地下への堀込みが意外に深く、主体部が多く残されており、古墳時代の貴重な資料が得られたことは僥倖であった。

こゝにその報告書の刊行をみると、大きな喜びであり、ひとえに長野県教育委員会や調査団長友野良一氏をはじめ関係各位のご指導やご協力の賜物であり、心から御礼を申上げる次第である。

昭和54年3月

宮田村教育長 林 茂

例　　言

- 1 本報告書は、南信土地改良事務所の計画した、宮田村圓場整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査として行われた、長野県上伊那郡宮田村カラス林、三つ塚遺跡の発掘報告書である。
- 2 調査は南信土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が調査団を編成し、発掘調査は昭和53年5月12日より～8月30日まで残務整理を含め実施した。
- 3 本報告書は契約期間内にまとめることが要求されており、且調査員はそれぞれ勤務についているため、調査結果の綿密なる検討や研究の時間が十分にとれなかったので、検出された遺構、遺物はできるだけ図化することにした。
- 4 資料作成では、丸山弥生・東野広次・保科徳子・友野良一・白鳥あき子・北原甲子三・北條芳隆
- 5 写真撮影は、友野良一・小木曾清・丸山弥生
- 6 本文執筆は、丸山弥生・友野良一・北條芳隆

目 次

序 文
例 言
目 次
挿図目次

| | |
|----------------|----|
| I 遺跡概観 | 1 |
| 1. 遺跡立置 | 1 |
| 2. 地質・層序 | 2 |
| 3. 歴史的環境と周辺の遺跡 | 3 |
| II 調査の経過 | 5 |
| 1. 調査に至るまで | 5 |
| 2. 調査の組織 | 5 |
| 3. 調査行程 | 6 |
| III カラス林遺跡調査 | 9 |
| 1. 遺跡の概要 | 9 |
| 2. 縄文時代の遺構と遺物 | 10 |
| 住居址 | 10 |
| 土塙 | 12 |
| マウンド | 13 |
| 溝状遺構 | 13 |
| IV 三つ塚古墳発掘の経過 | 35 |
| 参考文献 | 41 |
| 出土遺物一覧表 | 42 |
| Vまとめ | 66 |

挿図目次

| | |
|---|-------|
| 第1図 遺跡の位置 | 1 |
| 第2図 カラス林遺跡層序 | 2 |
| 第3図 三つ塚遺跡の層序 | 2 |
| 第4図 縄文時代中期遺跡の分布 | 3 |
| 第5図 古墳の分布図 | 4 |
| 第6図 カラス林遺跡・グリット設定図 | 9 |
| 第7図 第1号・第2号住居址実測図 | 14 |
| 第8図 第8・第6号住居址実測図 | 15 |
| 第9図 第7号住居址・ロームマウンド実測図 | 16 |
| 第10図 土塙実測図 | 17 |
| 第11図 溝状遺構実測図 | 18 |
| 第12図 カラス林遺跡出土遺物 | 19 |
| 第13図 カラス林遺跡遺物分布図(1) | 21・22 |
| 第14図 カラス林遺跡遺物分布図(2) | 23・24 |
| 第15図 南地区発掘状況・北地区発掘状況 | 25 |
| 第16図 第6・8号住居址 | 26 |
| 第17図 第7号住居址・ロームマウンド | 27 |
| 第18図 第8号住居址・第1号土塙 | 28 |
| 第19図 第4号土塙・層序・鎌・鎌出土状況・溝状遺構出土土器 | 29 |
| 第20図 溝状遺構・発掘状況・第7号住居址下に土塙内土器・溝状遺構断面・第7号住居址炉・ 第7号住居址の炉の下に出土した土塙 | 30 |
| 第21図 第7号住居出土の第7号住居址出土状況・土器出土状況 | 31 |
| 第22図 東塚出土直刀 | 37 |
| 第23図 東塚出土の須恵器 | 38 |
| 第24図 西塚出土の鉄鎌 | 38 |
| 第25図 遺構配置図(1) | 45・46 |
| 第26図 西塚実測図 | 47・48 |
| 第27図 西塚出土遺物分布図 | 49・50 |
| 第28図 西塚の主体部実測図 | 51 |
| 第29図 中塚実測図 | 53・54 |
| 第30図 東塚実測図 | 55 |
| 第31図 A・B・C・D・E・F調査地図 | 57・58 |
| 第32図 西塚出土土器(1) | 59 |
| 第33図 西塚出土土器(2) | 60 |

| | |
|----------------|----|
| 第34図 西塚発掘状況 | 61 |
| 第35図 西塚発掘状況 | 62 |
| 第36図 西塚・東塚発掘状況 | 63 |
| 第37図 西塚・中塚出土土器 | 64 |
| 第38図 西塚・東塚出土土器 | 65 |

I 遺跡の概観

1. 遺跡の位置

カラス林・三つ塚遺跡は、長野県上伊那郡宮田村の、天竜川西岸駒ヶ原段丘上に位置する。

天竜川は、同県諏訪湖に源を発するところの一級河川であり、静岡県の遠州灘へと注いでいる。伊那盆地においては、天竜川西岸を竜西地域、東岸を竜東地域と呼んでいるが、一般に竜西の方が広く、竜東の方が狭い。伊那谷は、広大な扇状地の隆起・解析の結果、いわゆる「田切地形」を形成している。

宮田村は、竜西地域のうち、大田切川の形成した扇状地の南半分を占めている。この扇状地は、大田切川の谷口から天竜川までの東西7km、大田切川とその北にある藤沢川とにはさまれた南北5kmを測る。同上の遺跡群の位置する駒ヶ原の段丘は、この大田切扇状地南端にある。

この駒ヶ原の段丘には、北縁に沿って西から、二つ塚遺跡・三つ塚上遺跡・三つ塚遺跡・カラス林遺跡・駒ヶ原下遺跡・滝ヶ原遺跡が連なっている。今回調査されたカラス林・三つ塚遺跡は、これらの遺跡群のちょうど中程に位置する。

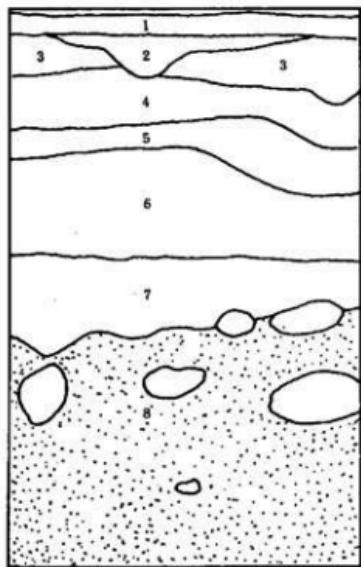


第1図・遺跡の位置（左矢印：三つ塚遺跡、右矢印：カラス林遺跡）

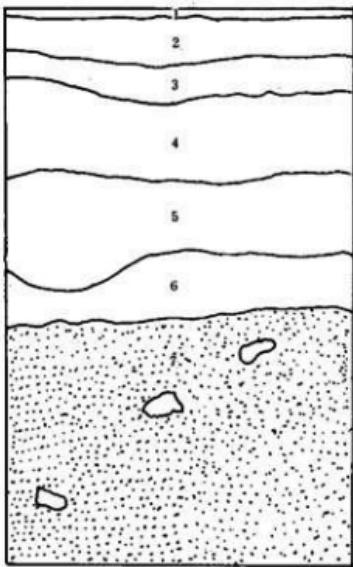
2. 地質・層序

地質 宮田村は、木曾山脈の中程に位置する。そのため、木曾山脈の岩質が基盤となって洪積台地が形成され、更に1~5mのローム層が堆積した地質構造である。

層序 下図は、各遺跡の地質調査の資料である。両遺跡とも、地場層下の黒色土層に遺跡が包含されていた。この遺物包含層が三つ塚遺跡では40cm程あるのに対し、カラス林遺跡では10cmに満たない。今回の調査でも、その遺物の出土量に大差があった。これは、昭和初期の開田工事の影響を、三つ塚遺跡はさほど受けなかったのに対し、カラス林遺跡では、遺物包含層までをも削平、破壊されてしまったためと思われる。



第2図・カラス林遺跡の層序



第3図・三つ塚遺跡の層序

層序の説明

| | |
|---|----------------|
| 1 | 表土。 |
| 2 | 黒色土。 |
| 3 | 黒褐色土、一部では褐色強い。 |
| 4 | 暗黒色土の混じる褐色土。 |
| 5 | 褐色土。 |
| 6 | 粘性のある黄褐色土。 |
| 7 | 砂礫層。 |
| 8 | 転石層 |

| | |
|---|--------------|
| 1 | 表土。 |
| 2 | 地場と埋土。 |
| 3 | 砂質黒色土。 |
| 4 | 炭混じりの暗褐色土。 |
| 5 | 暗褐色土。 |
| 6 | 砂粒を含む黄褐色土。 |
| 7 | 拳大の小石含む黄褐色土。 |

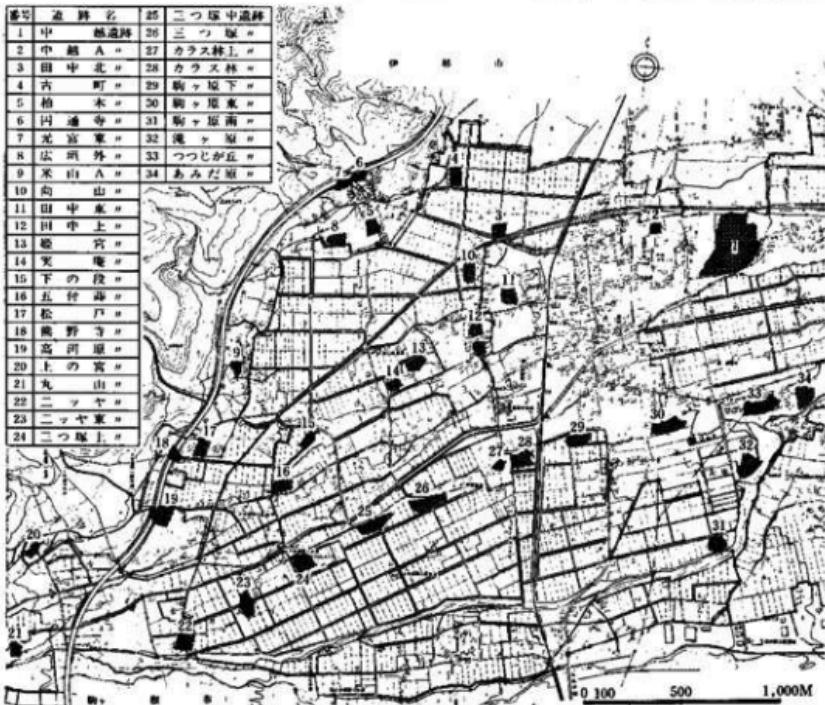
3. 周辺の遺跡と歴史的環境

カラス林・三つ塚遺跡は、昭和28年の埋蔵文化財分布調査によって確認された遺跡である。遺跡のある駒ヶ原の段丘は、宮田村の南側の部分に位置しており、以前は、一部畠地として利用されていたほかは、ほとんど山林であった。ここには、北端部に集中して東西に長く、遺跡が連なっている。西から二つ屋遺跡・三つ塚上遺跡・三つ塚遺跡（三つ塚古墳群を含む）・烏林遺跡（カラス林古墳群を含む）・駒ヶ原下遺跡（昭和53年・発掘調査）・駒ヶ原南遺跡（昭和52年・発掘調査）・滝ヶ原遺跡（昭和48年・発掘調査）となっている。しかし、昭和の初めの開田工事により、それらのかなりの部分が破壊されてしまった。開墾に携った人達の話からすると、かなりの数の甕や鉢等が掘り出され、またかなりの数の遺構が壊されてしまったらしい。

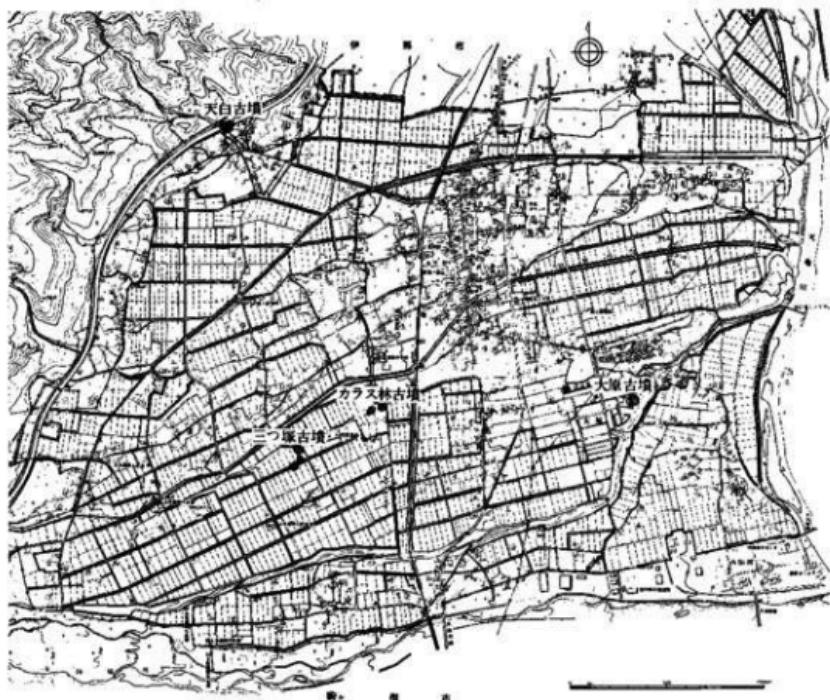
今回の調査では、縄文時代早期の土器片から始まって中世の陶器まで時代を通じて出土した。しかし、検出した住居址が縄文時代中期のものだったので、周辺の遺跡として、ここでは、宮田村にある縄文時代中期と古墳時代の主な遺跡にふれてみたい。

1. 滝ヶ原遺跡 昭和48年、住宅団地造成に伴い発掘調査が行なわれた。縄文時代中期の住居址が10軒検出された。この調査により、駒ヶ原段丘が、縄文時代中期の集落址上注目されることとなった。
2. 天白古墳 宮田村北割、山麓に近い傾斜地に築造されていた。昭和45年中央道用地内遺跡として

| 番号 | 地名 | 25 | 三つ塚上遺跡 |
|----|---------|----|--------|
| 1 | 中 駒ヶ原 | 26 | 三つ塚 |
| 2 | 中 駒ヶ原 A | 27 | カラス林上 |
| 3 | 田 中 北 | 28 | カラス林 |
| 4 | 古 町 | 29 | 駒ヶ原下 |
| 5 | 柏 木 | 30 | 駒ヶ原東 |
| 6 | 円 通 | 31 | 駒ヶ原南 |
| 7 | 光 富 東 | 32 | 滝ヶ原 |
| 8 | 広 岡 外 | 33 | つつじが丘 |
| 9 | 米 白 A | 34 | あみだ原 |
| 10 | 向 山 | | |
| 11 | 田 中 東 | | |
| 12 | 田 中 上 | | |
| 13 | 駒ヶ原 | | |
| 14 | 火 壇 | | |
| 15 | 下 の 段 | | |
| 16 | 五 何 菅 | | |
| 17 | 松 戸 | | |
| 18 | 萬 野 寺 | | |
| 19 | 高 沢 原 | | |
| 20 | 上 の 宮 | | |
| 21 | 丸 山 | | |
| 22 | 二 ツ や | | |
| 23 | ニ ツ や 東 | | |
| 24 | 二 つ 取 上 | | |
| 25 | | | |
| 26 | | | |
| 27 | | | |
| 28 | | | |
| 29 | | | |
| 30 | | | |
| 31 | | | |
| 32 | | | |
| 33 | | | |
| 34 | | | |



第4図・縄文時代中期の遺跡分布



第5図. 古墳の分布

発掘され、現存しない。調査の結果、この古墳は、東西35m・南北27m・高さ4mの円墳であり、横穴石室をもち、副葬品として鉄鏃・刀子・そして土器を出土する、終末期古墳であると判明した。追葬の痕跡が認められる。

- 3.カラス林古墳群 駒ヶ原の段丘の北縁に沿って東西30m程の間隔で並んで築造されていたが、大正時代末には、開墾のため、2号・3号墳が破壊されてしまい、1号墳は昭和51年に宅地造成のため、心ない業者により、無断破壊をされてしまった。捨てられていた封土を「ふるい」にかけたところ、人骨・直刀破片等が発見された。
- 4.三つ塚古墳群 今回、調査の対象となった遺跡である。昭和27年に第1次調査が行なわれたが、その詳細については、三つ塚古墳群の調査の項へまわしたい。
- 5.広垣外遺跡 宮田村北割・宮ノ沢・長坂両扇状地南端の沖の芝湿地帯に接する。圃場整備事業に伴い、昭和49年に発掘調査された。調査の結果、古墳時代の住居址6軒が検出された。付近一帯が古墳時代の大集落址であったと思われる。

II 調査の経過

1. 調査に至るまで

宮田村総合開発計画が、昭和45年にたてられ、その事業の一部として、昭和48年以降毎年、県営圃場整備事業が実施してきた。その都度該当地域における埋蔵文化財発掘調査を出来得る限り行い、文化財保護に努力してきた。

この関係事業も近く終盤を迎えるつあり、その中で本年は、烏林、三つ塚遺跡の発掘調査が行われた。この調査地域は広範囲であったため、3ヶ月の期間を要した。

三つ塚古墳のうち西塚は、昭和27年大場磐雄先生により調査された遺跡でもある。今回の調査により縄文時代早期・中期・後期、古墳時代の遺構や遺物が出土し、多大な成果をあげることができた。

今回の調査に際し、文化庁、県文化課、南信土地改良事務所のご指導、ご協力に対し心からお礼と感謝をいたす次第である。

(教育次長 森下清)

2. 調査の組織

カラス林・三つ塚遺跡調査団

| | | | | |
|-------|-------|------------|-------|-------|
| 団長 | 友野良一 | 日本考古学协会会员 | | |
| 調査員 | 田畠辰雄 | 宮田村考古友の会会長 | | |
| タ | 赤羽義洋 | 長野県考古学会員 | | |
| タ | 丸山弥生 | タ | | |
| タ | 小木曾清 | タ | | |
| 調査事務局 | 林金茂 | 宮田村教育長 | | |
| | 森下清 | 宮田村教育次長 | | |
| | 古河原正治 | 宮田村教育委員会 | | |
| | 伊藤依雄 | タ | | |
| | 竹松正恵 | タ | | |
| 発掘協力者 | 木下進 | 春日修一 | 百沢乙平 | 保科義重 |
| | 小松秀男 | 大沢実 | 藤川周一 | 小松博子 |
| | 小林文吾 | 小田切英夫 | 小林喜男 | 北沢武男 |
| | 春日宗 | 太田利雄 | 保科兼雄 | 本田甲子雄 |
| | 伊藤柳治 | 酒井伝恵 | 墨矢勇夫 | 加藤大八 |
| | 春日松己 | 平沢八千子 | 小田切房子 | 林美弥子 |
| | 保科徳子 | 小松二三子 | 白鳥あき子 | 有賀きみ子 |
| | 田中カズミ | | | |

3. 調査の行程

| 月 | 日 | 日 | 誌 |
|----|---|--|---|
| 4 | 5 | カラス林遺跡の現地調査、教育長、友野で。 | |
| 6 | | カラス林遺跡の地質調査を行なう。 | |
| 8 | | 三つ塚附近の現地調査、教育長、友野で。 | |
| 9 | | 三つ塚附近の地質調査を行なう。 | |
| 10 | | 遺跡の地形写真の撮影を行なう。 | |
| 14 | | カラス林遺跡の分布調査。 | |
| 15 | タ | タ | |
| 17 | タ | タ | |
| 18 | タ | タ | |
| 19 | タ | タ | |
| 20 | | 役場のトラックで調査用具の運搬。 | |
| 21 | | 測量の坑打。 | |
| 22 | | 作業小屋の位置を地主と相談して決定。 | |
| 24 | | トランシットで調査区域の測量。 | |
| 25 | タ | タ | |
| 26 | タ | タ | |
| 27 | タ | タ | |
| 28 | | 三つ塚附近の測量区域の選定及び坑打。 | |
| 5 | 8 | タ | タ |
| 9 | | 三つ塚附近の発掘地点の測量。 | |
| 10 | タ | タ | |
| 11 | | カラス林遺跡グリッド設定。 | |
| 12 | | カラス林遺跡の調査が開始される。調査は木下進氏が耕作していた水田より東に向って。 | |
| 13 | | 南側グリッドを東に向って調査が行なわれる。 | |
| 15 | | 南側グリッドを基点として北側に拡張する。 | |
| 17 | タ | タ | |
| 19 | | 第1号住居址を発見する。住居址調査のほかグリッドを調査。 | |
| 20 | | 第2号住居址を発見する。 | |
| 22 | | 調査が行われた各グリッドの断面の実測。 | |
| 23 | | 溝状の遺構が見つかる。 | |

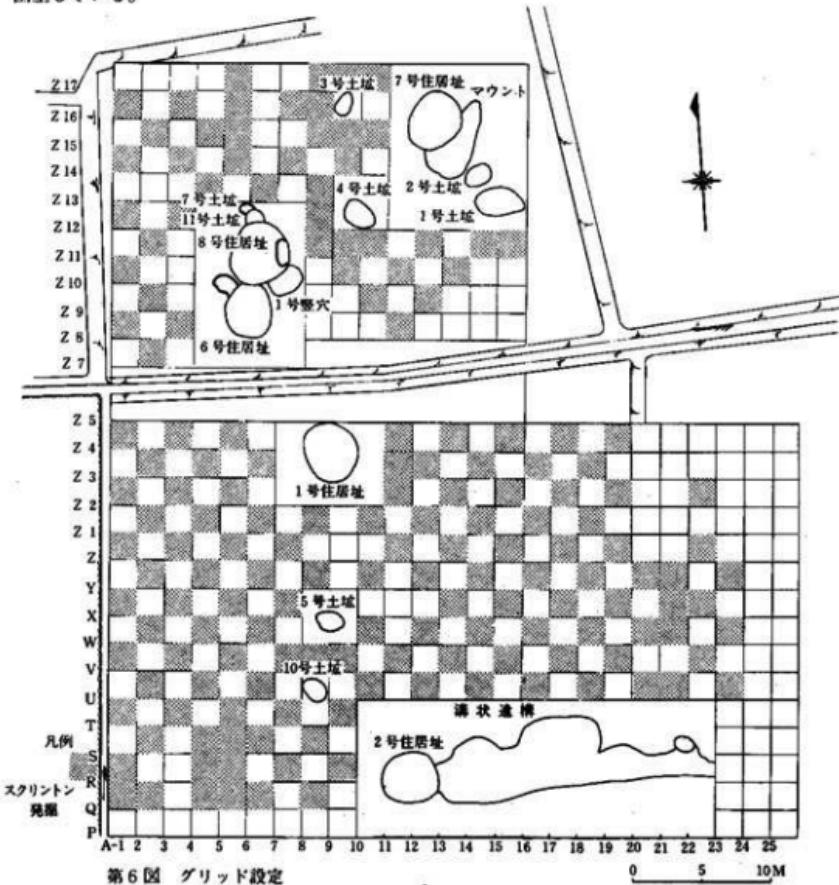
| 月 日 | 日誌 |
|------|---------------------------------|
| 5 24 | 教育長の現地指導がある。 |
| 25 | 第1・2・3号土塙検出される。 |
| 26 | 第6号住居址発見される。午後第8号住居址が確認される。 |
| 27 | 溝状遺の調査が続く。 |
| 28 | 第7号住居址が発見される。南側にロームマウドも確認される。 |
| 29 | 第4・5・6・7・8・9・10・11の土塙が発見される。 |
| 6 1 | 第1号住居址の実測。 |
| 2 | 第2号住居址の実測。 |
| 3 | 第6号住居址の実測、地質調査坑を掘る。 |
| 5 | 第7号住居址の実測、調査もれの各グリッドの調査。 |
| 6 | 溝状遺構の調査と一部断面測量。 |
| 1 | 溝状遺構の発掘に全力をあげる。 |
| 26 | マウンドの発掘。三つ塚遺跡のB.Mの設定。 |
| 1 | マウンドの発掘を続行。土塙の測量。三つ塚遺跡A地区。 |
| 30 | 三つ塚遺跡C地区、E地区にも調査をひろめる。A地区地層調査。 |
| 31 | 三つ塚遺跡のA地区のグリッド調査。 |
| 7 3 | C地区の南北に通るグリッド断面調査。E地区に土塙が発見される。 |
| 4 | 古墳の調査で教育長と打合せ、西塚に丁張を設置する。 |
| 5 | E地区の調査を進める。作業小屋の引越を行なう。 |
| 6 | C地区に土塙群が確認される。 |
| 7 | C地区の土塙調査。 |
| 8 | 三つ塚西塚の調査を進める。 |
| 10 | 西塚調査。G・H地区的グリッドの調査、C地区的全測。 |
| 11 | 東塚の周溝の確認。西塚の周溝掘り下げ。 |
| 12 | 9時頃まで小雨、西塚の一部測量。 |
| 13 | 東塚周溝より高杯など検出、北側の周溝確認。 |
| 14 | 西塚周溝より須恵器の高杯発見。H地区第1号住居址発見。 |
| 15 | H地区第2号住の発見。西塚の土師器検出。 |
| 16 | H地区グリッドの調査を進める。 |
| 17 | H地区第3号住居址、第4号住居址確認。 |
| 18 | 東塚周溝内から土師器、須恵が発見される。 |
| 19 | 東塚西道路ぎわの周溝内にも遺物検出、H地区住居址調査。 |
| 20 | H地区的遺構に調査は集中する。 |
| 21 | 西塚周溝と一部主体部上の調査。 |

| 月 | 日 | 日誌 |
|---|----|------------------------------------|
| 7 | 22 | 西塚調査、H地区の住居址の調査。 |
| | 23 | 西塚調査、G地区の調査。 |
| | 24 | 中塚があった位置に南北にトレンチを設定する。 |
| | 25 | H地区の住居址の調査。 |
| | 26 | 西塚の周溝のベルトを取除く。 |
| | 27 | 宮田村村議会議員の見学。西塚の主体部の調査。 |
| | 28 | H地区の5号・6号住居址の確認。 |
| | 29 | H地区の5号・6号住居址の調査。 |
| | 31 | 第8号住は西塚の西周溝内に炉址のみ発見する。 |
| 8 | 1 | 西塚・東塚のベルトの断面測量、5・6号住居址の清掃、写真。 |
| | 2 | 5・6号住居址の実測。9号住居址を発見、小学生参加、中学校見学。 |
| | 3 | 第9号住居址の測量及び写真。 |
| | 4 | 西塚の実測、H地区の全体測量と写真。 |
| | 5 | 調査不十分の個所の調査、清掃を行なう。 |
| | 7 | 4月以来の調査もようやく終了した。後片付。 残務整理..... |

III カラス林遺跡調査

1. 遺跡の概要

カラス林遺跡は、駒ヶ原段丘の北縁に、東西に長く連なっている遺跡群の中で、中程に位置し、西は三つ塚遺跡、東は駒ヶ原下遺跡と接している。東西 500 m、南北 200 m 程の規模である。今回調査の対象となったのは、その東側部分の東西 60 m、南北 90 m の総面積 5,400 m² である。しかし、実際の調査では、北側部分の段丘突端に集中した。調査は、調査南西隅を基点とし、2 × 2 m のグリッドを設定し、北へ A～Z 9、東へ 1～25 とした。発掘の方法は、グリッド発掘であり、チドリに掘り下げて、その遺物の分布状態や遺構の有無を観察しつつ、必要に応じて拡張するということにした。調査の結果、竪穴住居址 5 軒、土塙 11 基、ロームマウンド 1 基、性格不明の溝状遺構 1 基が確認された。住居址は、いずれも縄文中期のものであり、また 1 つの土塙からも中期の土器片が出土している。



第6図 グリッド設定

2. 縄文時代の遺構と遺物

第1号住居址（第7図）

本址は、Z 5-9 グリッドに発見された。住居址の規模は東西3.70m、南北4.20mの階円形である。壁は駒ヶ原耕地整理事業のおり、床面上附近まで削り取られ壁が辛じて残った状態である。従って、壁内外の施設について知ることはできなかった。床はさほどかたくはなかった。床面は東に傾斜し東壁がようやく知り得る程度である。柱穴は4柱であるが、1個所に側柱と思われる穴が検出されている。柱穴内には小石がいくつか結めたような状態で発見された。このことは柱を建ることに関係をもつのかもしれない。床面には石が多く散在していた。炉址は中央や、北寄りに設けられ、長径50cm、短径40cm、自然石7箇の炉石を使用した長方形の石囲炉址である。炉の附近は80cm内外にわたって焼土が広がっていた。

遺物、土器 1.縄文土器。2.僅かに縄文がうかがわれるが、下部は無文。3.無文地に半截竹管より併行沈線が縦に施された土器片、赤褐色胎土に石英を含む、焼成良好。4.無文地に半截竹管を施した土器、表面に黒煙が付着している變形土器と思われる。5.竹管具により横位に階円文が施された變形土器、裏面は剥落している。6.薄手土器で半截竹管により山形及び縦に併行沈線文が施された、縄文中期初頭型式の土器片。1~3は縄文中期後葉曾利Ⅲ~Ⅳ式に比定される土器と考えられる。4~6は中期初頭平出3Aに併行する土器。5は縄文中期後葉、曾利Ⅲ式に比定される土器と考えられる。従って本住居址は、曾利Ⅲ式~Ⅳ式と考えてよからう。17.變形土器底部。

第2号住居址（第7図）

本址はQ11~12グリッドと溝状遺構の西端に発見された住居址である。住居址の規模は東西3.5m、南北3.5mの円形の住居址である。住居址の東側は溝状遺構によって切られているので、この部分は明かでない。壁は南側で27cm、北側壁は42cm、西壁は37cm、東壁は溝状遺構で切り取られているため不明。西壁には10×65の花崗岩の自然石が住居内に50cm張り出している。床面は西半分が堅緻であったが、東半分はややわらかであった。柱穴の1個は確認されたが、他は不明である。炉址は中央や、北寄りに設けられ、炉石と考えられる2個を除いて他は抜石されている。炉址内と思われる部分60cm内外は相当深く焼土が認められた。南から東側の壁に接して拳大~頭大の自然石が散在して検出された。

遺物、土器

7.は深鉢形土器の口縁部の突起が付されている部分である。突起の上面は三角形になっている。突器の下から把手が付されていたのが欠損したかたち。口縁部と頸部の間に竹管具による連続爪形文が三角形を作り、内部に三角刻文が施されている。色調は赤褐色、雲母と石英粒が含まれ、焼成は良好である。縄文中期中葉の土器である。

第6号住居址（第8図）

本址は、Z 10-6 グリッド井筋の北側に発見された住居址である。規模は東西3.5m、南北3.7

m隋円形のプランをもつ竪穴式住居址である。壁面及び壁外には何の施設も認められなかった。柱穴は4個検出され、柱穴の形態は円形及び隋円形である。床面中央に長径35、短径25cm細長い花崗の自然石を固むようにして、20~30cmの広さに地焼炉かと思われる焼土が発見された。住居址の東南の壁に接して拳大~頭大の自然石が24個、廃絶後投入されたと思われる形で発見された。住居址の北側は8号住居の南壁と紙一重というところで接近している。住居址の北西壁に第11号土塙が接している。

遺物、土器

土器、8.は、竹管具により横位に施文された爪状土器、縄文中期中葉末のものであろう。9.は、無文土器片、10.は無文地に併行沈線が施された土器片、表面に黒煙が付着している。11.は竹管にて併行沈線が三角状に施された土器片である。総じて曾利Ⅱ~Ⅲ式に比定されるものと考えられる。

第7号住居址（第9図）

本址は、第8号住居址の東段丘に近い位置に発見された住居址である。住居址の規模は東西約4m、南北約4mの不整円形の竪穴住居址である。住居址の南側はロームマウンドを切り込んで作られている。

床面はよく踏かためられ、やや東に傾斜している。柱穴は4本検出された。炉は中央や、北寄りに設けられ、長径約22cm、短径約12cm大の細長い花崗岩の自然石で三方囲まれた石圓炉である。炉内に焼土と木炭が検出された。また、床面上には砥石2個が発見された。なお、ロームマウンドに接して土器が集中して発見された。住居址の東側には8・9号の土塙が隣接している。炉址を取り去ってみると貼床の下部約35cm下に上面巾70cm、下底35cmの土塙が検出された。この土塙に2個体分以上の土器片が鉢状に貼付けた状態で発見された。これとまったく同じ例が三つ塙遺跡にも発見されている。

遺物、土器

12. 13. 14.は縄文地に竈状器具により、唐草文状の文様が施された變形土器片、15.は陰線による唐草文系の土器、過文の間を竹管による併行沈線で埋めている。16.は陰線による渦巻文土器、色調は赤褐色、胎土に雲母、石英粒を含んでいる土器片。18.は、深鉢形の底部と思われるもので、無文、底部にアジロが窺われる。19.縄文土器、総じて縄文中期曾利Ⅱ式に比定されるものであろう。

第8号住居址（第8図）

本址は第6号住居址の北側に接して発見された住居址である。規模は東西4.5m、南北4.3m隋円形のプランをもった竪穴住居址である。西東の壁高は約30cm、北壁は約26cmとやや底い、北壁につづいて土塙が隣接している。また、6号住居址に接して第1号竪穴を切っている。柱穴は1個検出された。床面は水平であり堅くはなかった。焼土が中央や、北寄りに認められたが、炉石と思われる石は明かでない、地焼炉ではなかろうか。本住居址内にも廃絶後投入されたと思われる花崗岩

の石が認められた。

遺物、土器

土器、20. は隆帯の間に「く」字状の連続爪形文を施した縄文中期中葉井戸尻式に比定される土器片。21. は半截竹管により縦または横位階状施文した曾利Ⅱ～Ⅲ式の土器片。

第1号土塙（第10図）

ロームマウンドの南第1号土塙に隣接した位置に発見された遺構である。規模は長径3.7m、短径2.0m、西が尖った階円形、底部は舟底をした土塙である。

遺物 覆土中と壁外から縄文中期後葉の土器片が発見された。

第2号土塙（第10図）

第1号土塙と、ロームマウンドとの間に発見された遺構である。遺構の規模は長径1.9m、短径1.7m、深さ21cm、底部擂鉢形を呈した階円形土塙である。

遺物は、壁外から縄文中期後葉の土器片が出土した。

第3号土塙（第10図）

第7号住居の西Z16—9グリッドに発見された遺構である。規模は長径1.72m、短径85cm、深さ35cm、舟底形である。土塙内からは小礫が多くかった。

遺物 土塙内からは遺物は検出することができなかった。

第4号土塙（第10図）

本土塙は、第8号住居址と第7号住居址との間、Z12—9・10号グリッドに発見された遺構である。規模は長径3m、短径1.35m、深さ45cm、階円舟底形土塙である。

遺物は発見されなかった。

第5号土塙（第10図）

本土塙は、Wの9グリッドに発見された遺構である。規模は長径1.75m、短径1.2m、深さ24cm、底部が平面の階円形土塙である。土塙内に20×20cm、花崗岩の自然石が落込んでいた。

遺物、土器 22. 25. は縄文 23. 24. 26. 27. は竹管による併行沈線文土器である。総じて縄文中期曾利Ⅱ式に比定されるものであろう。

第7号土塙（第7図）

本土鉱は、ロームマウンドの南壁に接して発見された土塙である。長径90cm、短径60cm、深さは17cm、ロームマウンドにて北側は切られている土塙である。

遺物は発見されなかった。

第10号土塁（第10図）

本土塁は、U-8グリッドに発見された遺構である。規模は長径1.7m、短径1.2m隋円形である。底部は舟底形を呈している。

遺物 遺物は検出できなかった。

第11号土塁（第10図）

本址は第8号住居址の北側に張り出した部分の北側に発見された土塁である。長径1.15m、短径65cm、深さ27cm、隋円形の土塁である。

遺物は発見されなかった。

号住居址がマウンド

ロームマウンド（第9図）

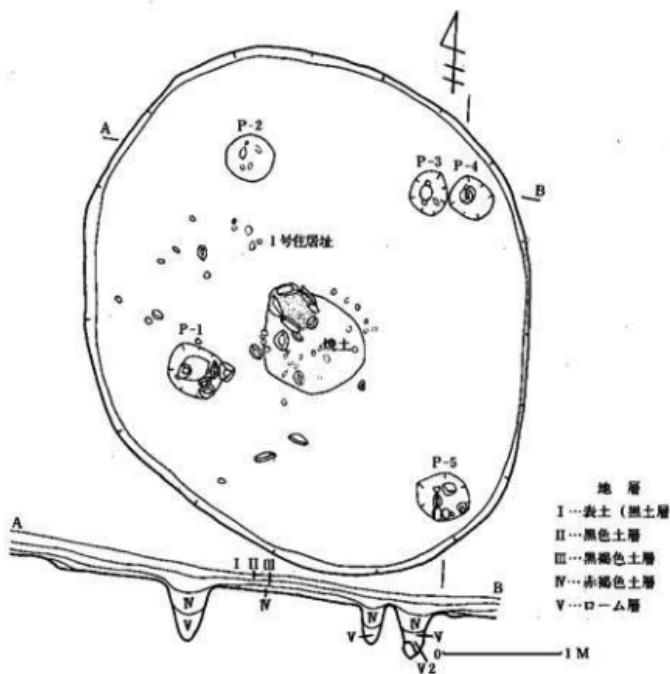
第7号住居址がマウンドの北側の約三分の一を掘り欠いている形。規模は長径5.7m、短径約3.2m、いずれも周溝の外壁迄を測る。高さは70cm、上面は平である。北三分の一は切取られている。マウンドの底に近く黒色土層約10cmが検出されたところより、このマウンドは盛土であること確認された。河原石がいくつか見受けられた。

遺物 マウンドの周溝から縄文中期末葉の土器が検出された。北側に縄文中期末葉の土器が集中して検出されたが、これは7号住居址の作られる前の遺物ではないかと考えられる。

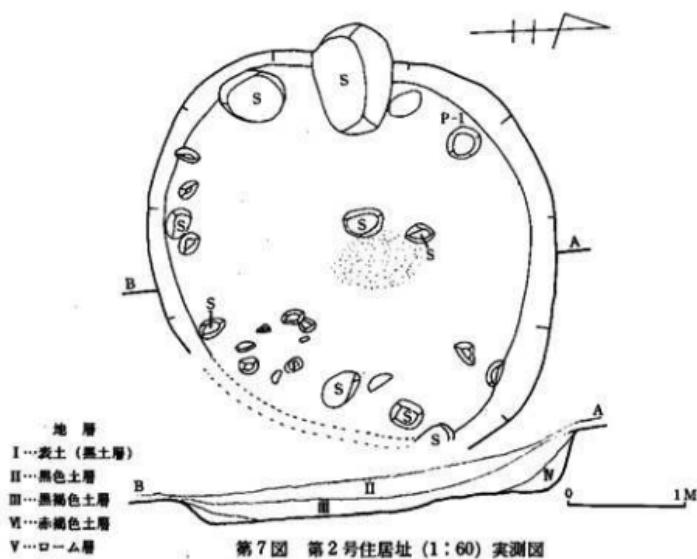
溝状遺構（第11図）

発掘区の南端に位置し、東西に長く伸びている。地場層を削平したところ、黒色土や暗褐色土を覆土とする落ち込みが、グリッドQ・R・Sラインにわたって東西に長く認められた。そのプランが正面円形にも、方形にも見えたりで、当所、いくつかの遺構が切り合っているのではないかと考えた。そこで、各グリッドの四方に20~30cmのベルトを残し、地層を観察しながら掘り下げた。地場層には埋土が施されていた。これは、水田利用のためのものであり、落ち込みの中央ほど厚く堆積していた。耕土・地場層を第I層とすると、黒色土と褐色土の混ざった埋土の層は第II層であり、第III層は、それ以前の表上と思われる。第IV層は、砂質黑色土であり、流れ込みによる自然堆積層である。調査はこの段階で、遺構の切り合いによる様相という考え方から、溝状の落ち込みと判断せざるを得なくなった。第V層は、黒色土に褐色土が混ざった層であり、調査中、貼床と考えたほどである。その層は、全面にわたって、というわけではない。溝の東側部分や壁附近には認められない。掘り上った状態では、底面が凹凸がはげしく、大石が露出していた。また、壁の一部には袋状の部分が認められた。

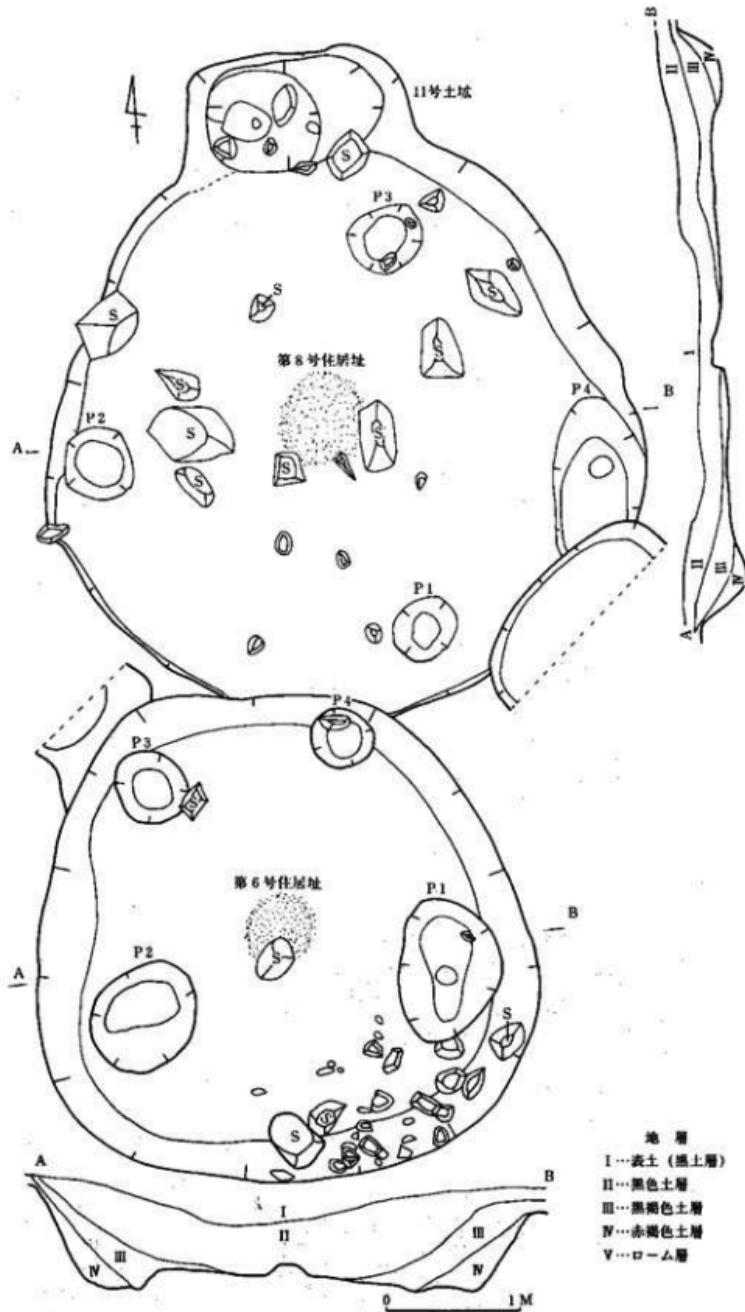
遺物 28. は變形土器の口縁部、縄文中期中葉の土器、29. は竹管にて縦に沈線が引かれた土器片、30. はグリッドから発見された鎌・近世のものか。



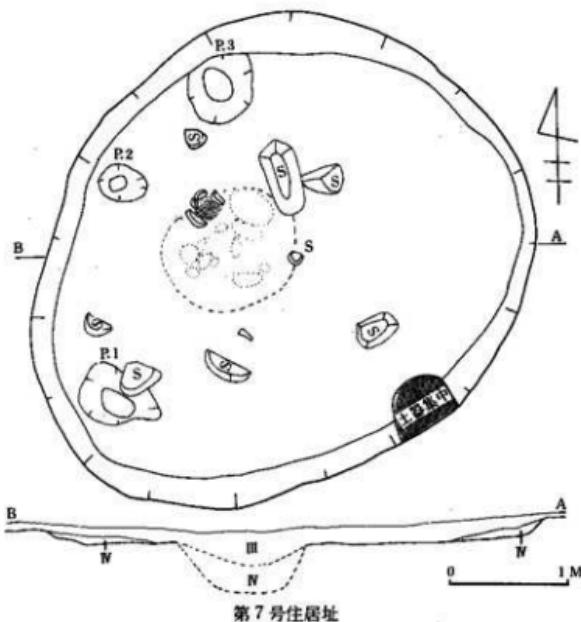
第1号住居址 (1:60)



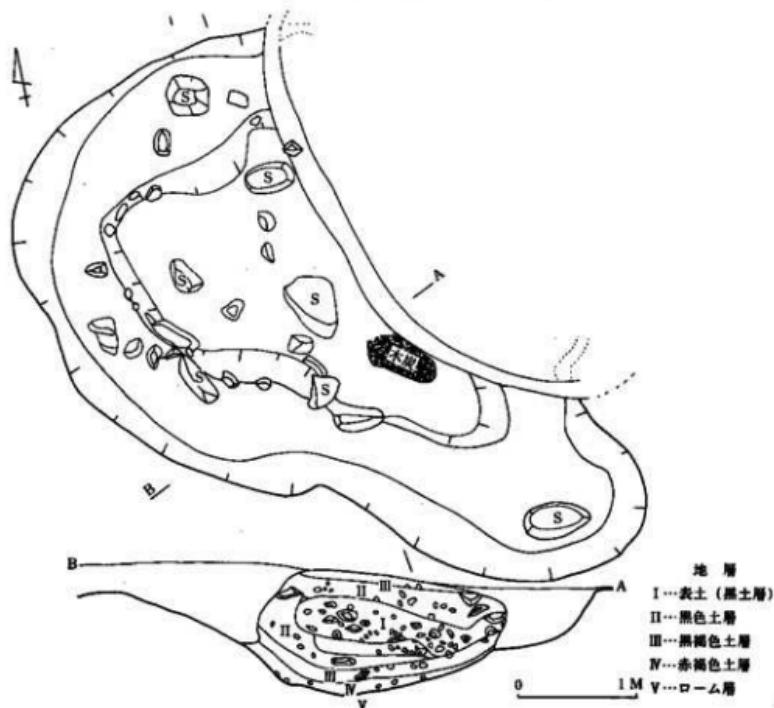
第2号住居址 (1:60) 実測図



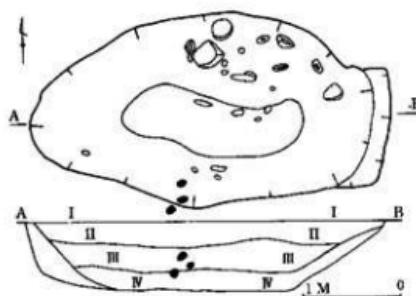
第8図 第8号住居址(上) 第6号住居址(下) (1:60) 実測図



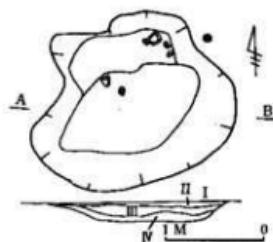
第7号住居址



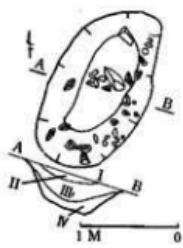
第9図 ロームマウンド



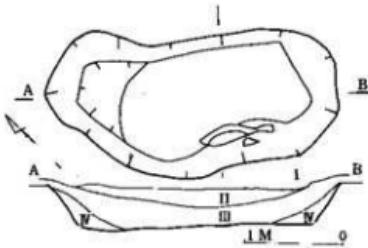
第1号土坡



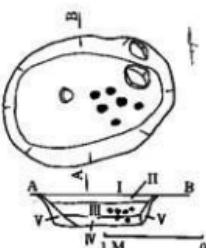
第2号土坡



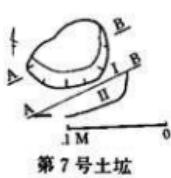
第3号土坡



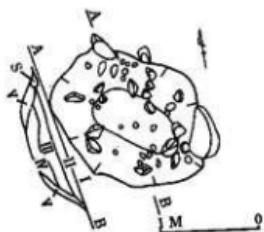
第4号土坡



第5号土坡



第7号土坡



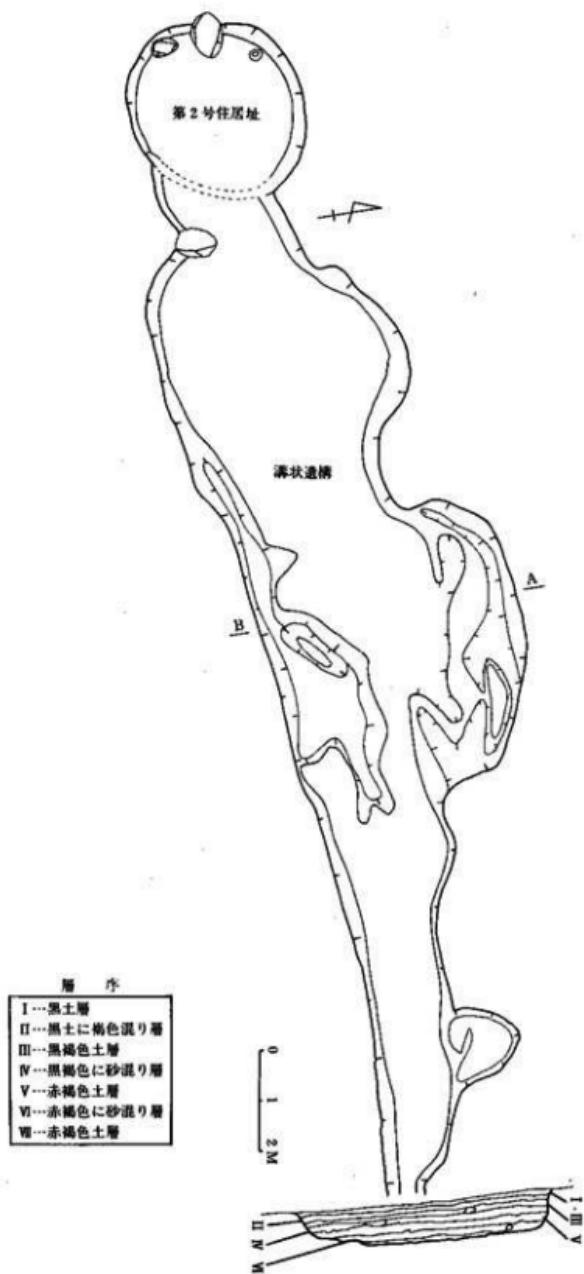
第10号土坡



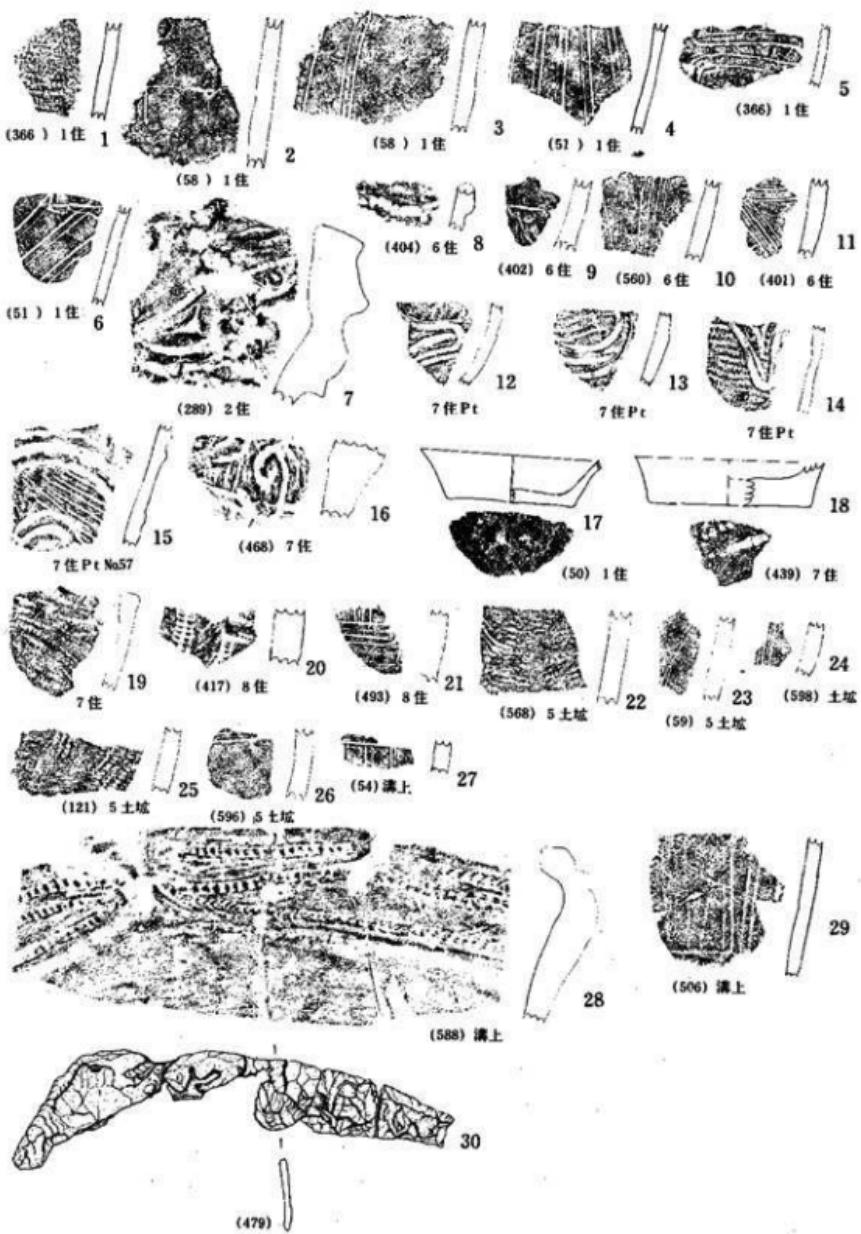
第11号土坡

第10图 土坡实测图

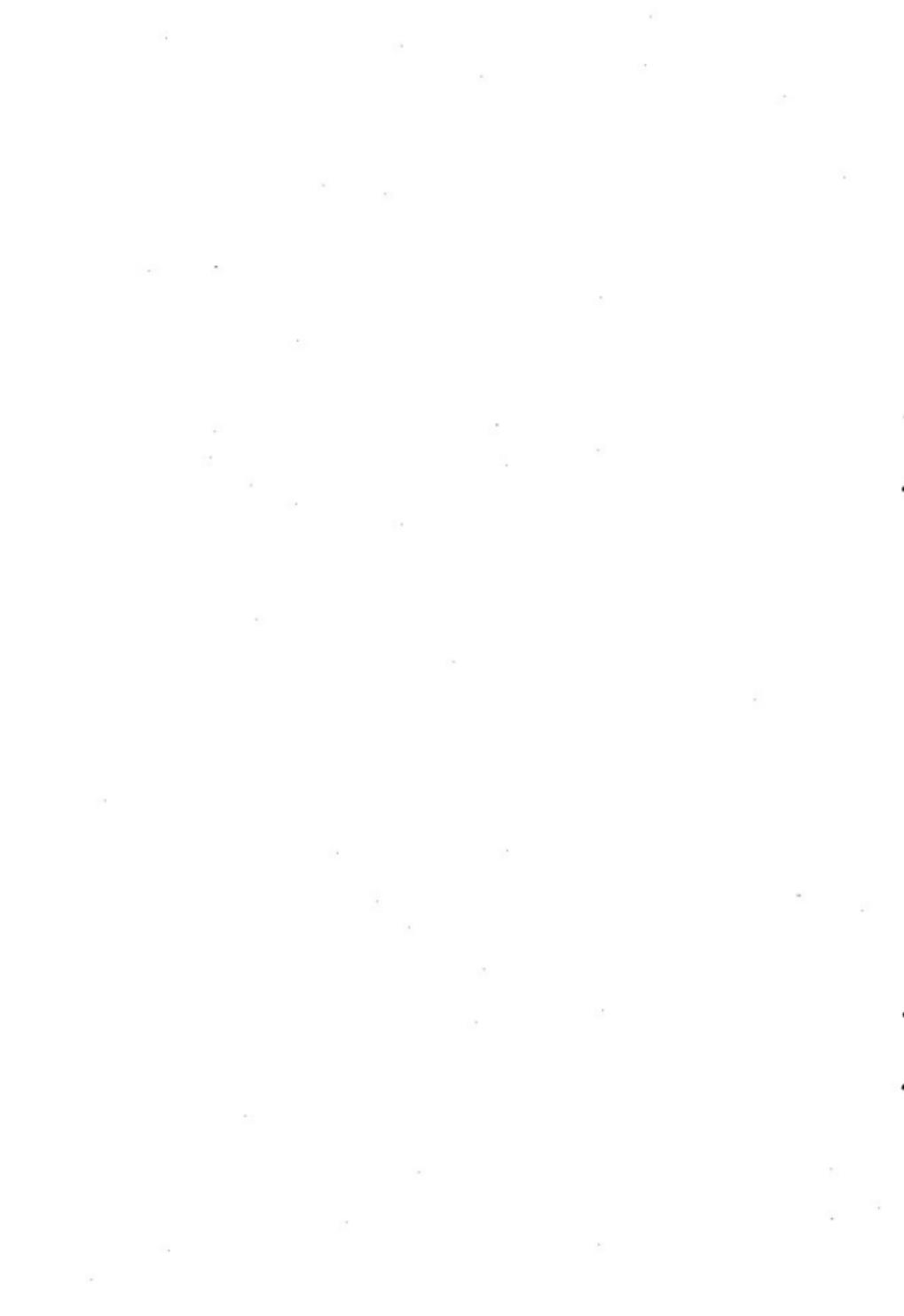
地 带
I … 表土 (黑土层)
II … 黑色土带
III … 黑褐色土带
IV … 褐褐色土带
V … 口 — 人带

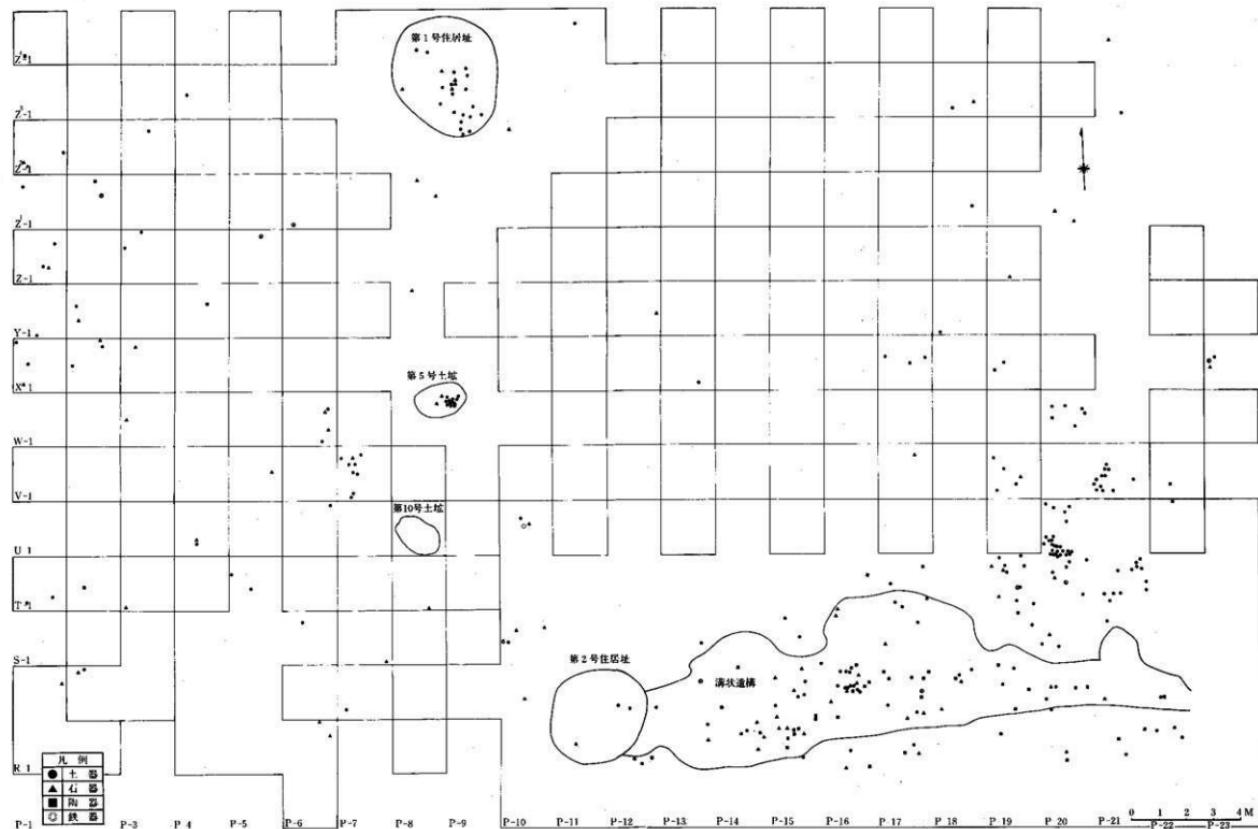


第11図 溝状遺構実測図 (1:120)



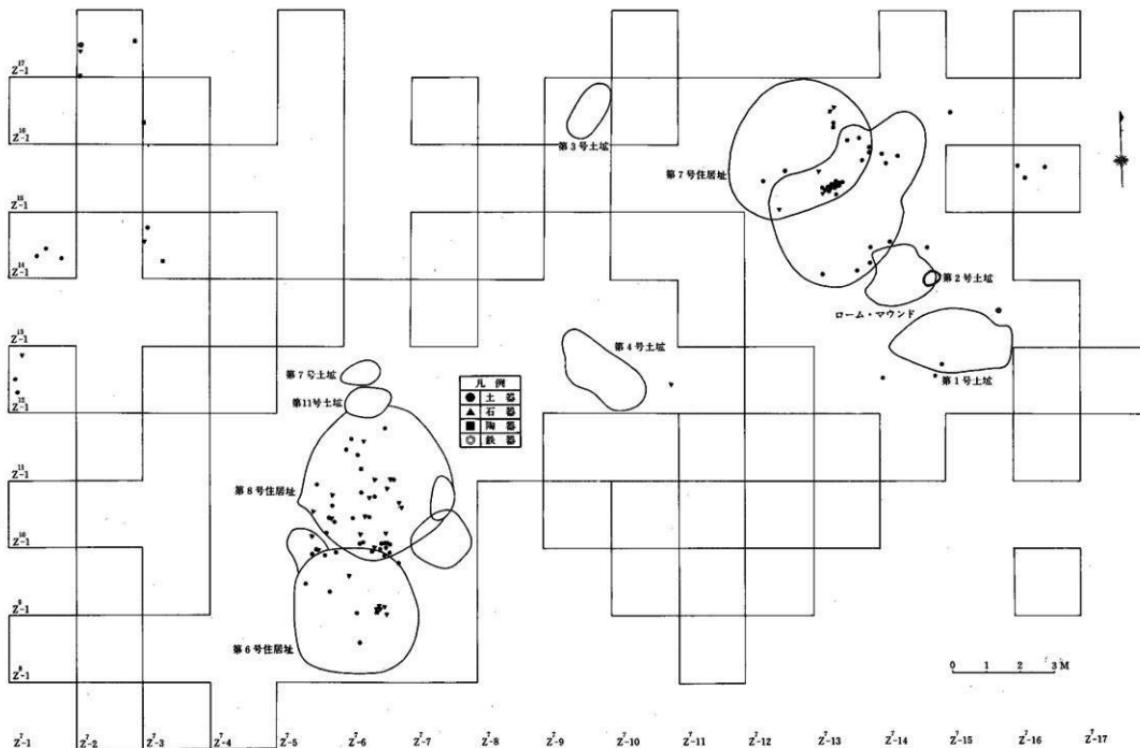
第12図 カラス林出土遺物





第13図 カラス林遺跡遺物分布図(1)





第14図 カラス林遺跡遺物分布図(2)





南地区発掘状況



北地区発掘状況



第6号住居址



第8号住居址



第7号住居址



ロームマウンド



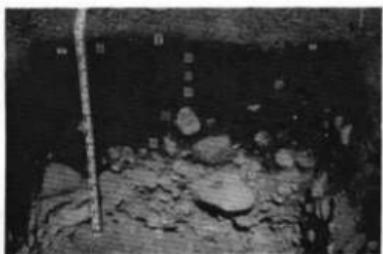
第8号住居址



第1号土塀



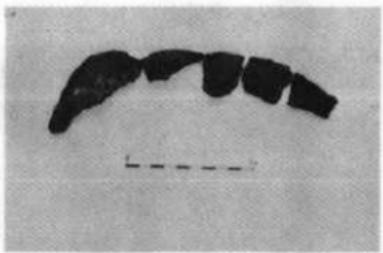
第4号土塙



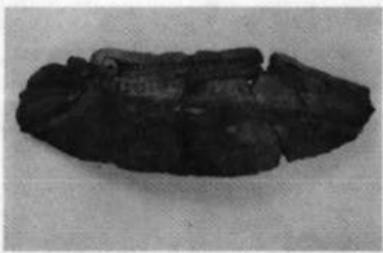
層序



出土状況



縁



溝状構出土

第19図



溝状遺物



溝状造構断面



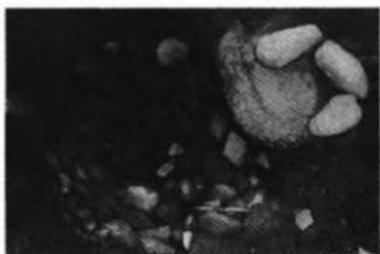
溝状造構の断面



発掘状況



第7号住居址のが



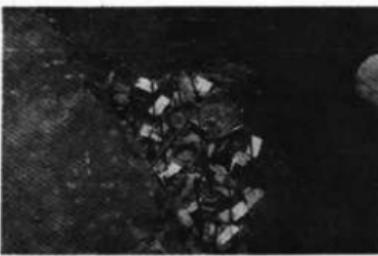
第7号住居址の下に土域内の土器



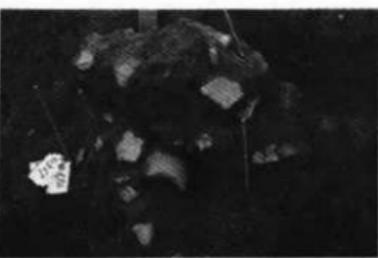
第7号住の炉下に出土した土器



第7号住出土

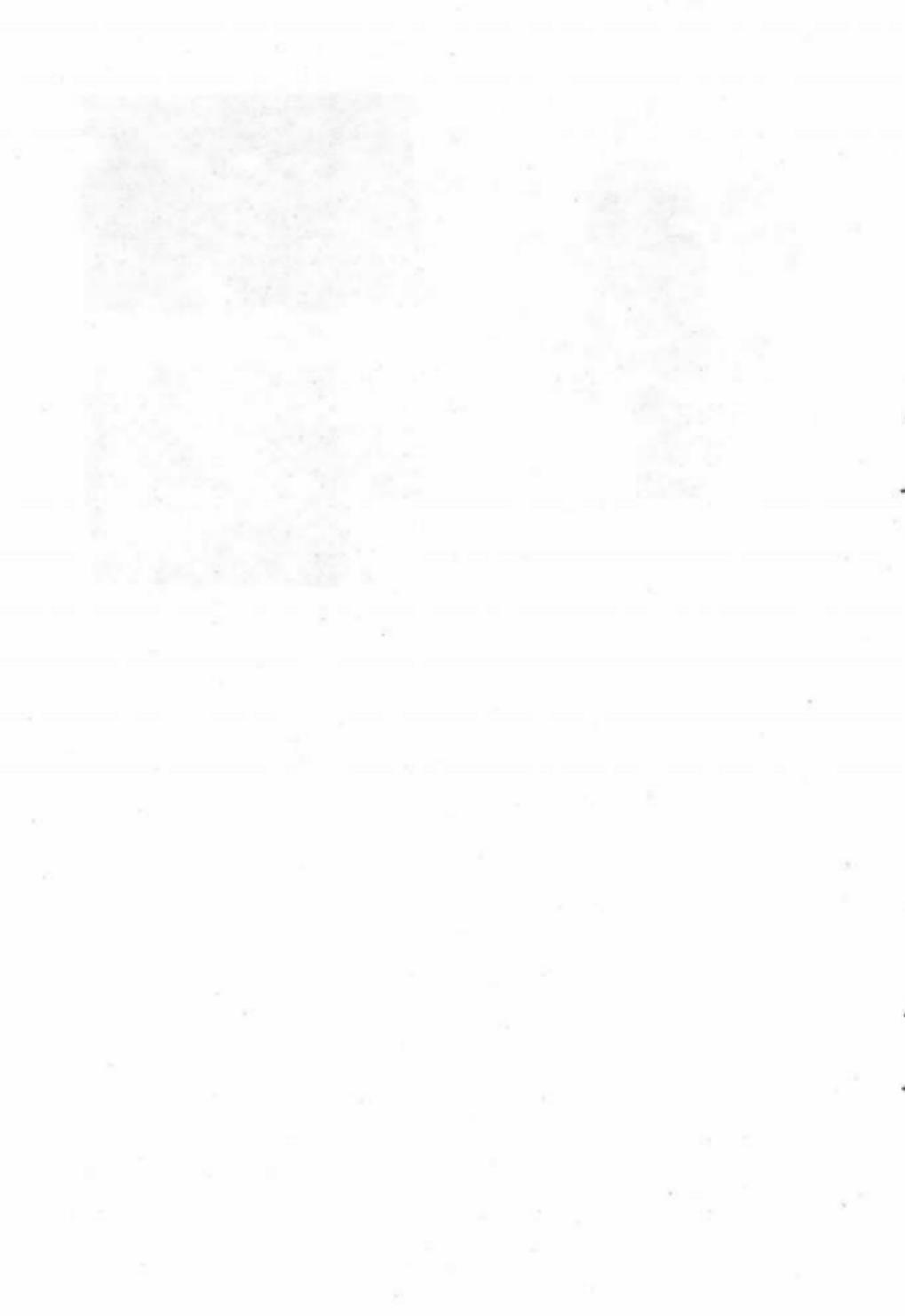


第7号住出土状况

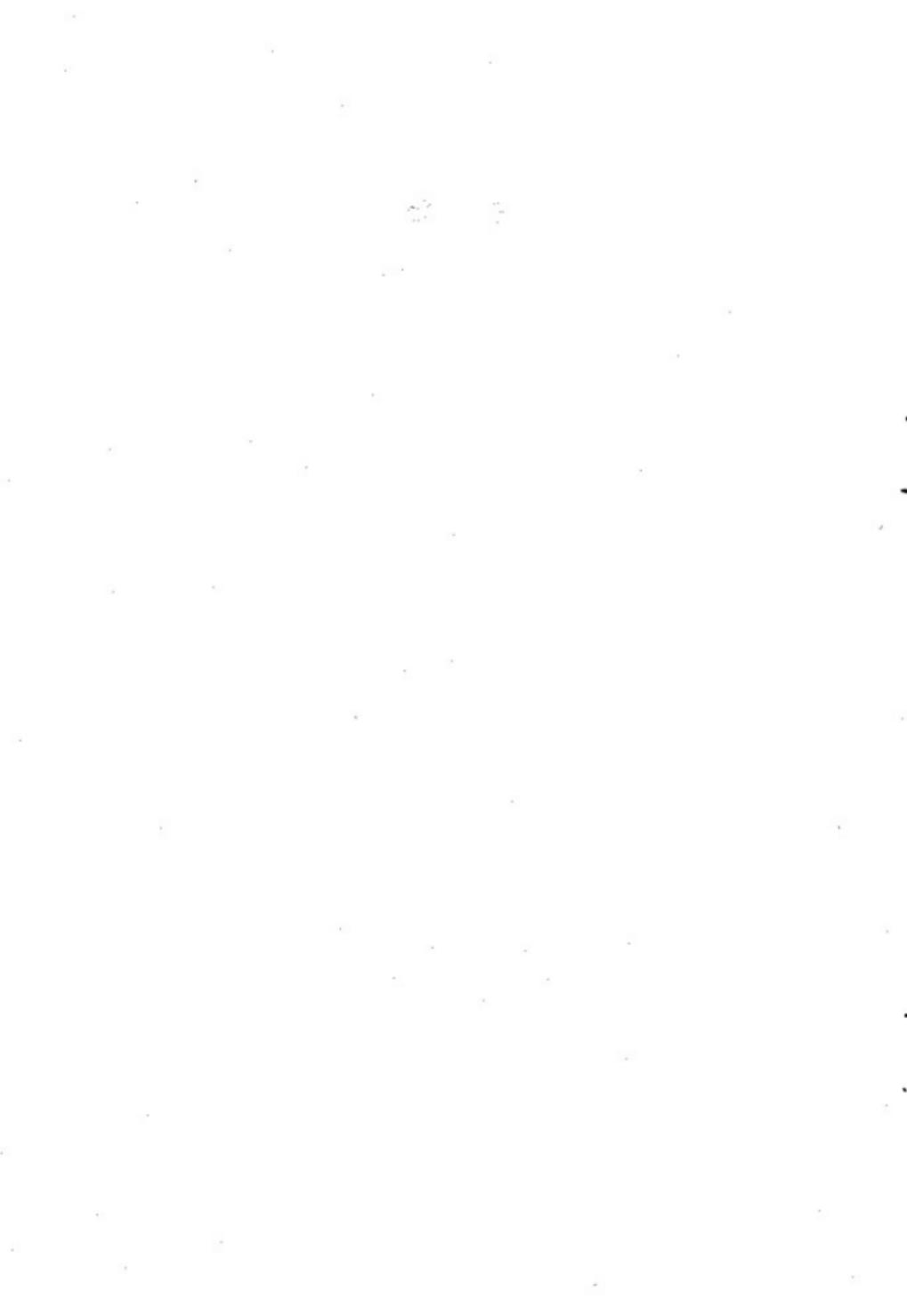


土器出土状况

第21图



三つ塚



IV 三つ塚古墳発掘の経過

1. 昭和27年度の村単事業として、村道三つ塚線の改修工事のため、東塚古墳の墳丘の西端が工事にかかることとなったので、宮田村は文化財保護法に基き、昭和27年7月9日発掘届を提出する。同年8月15日宮田村文化財保護調査会を宮田村役場で開き、発掘準備及び発掘方法について協議する。

発掘担当者に国学院大学教授大場磐雄氏、調査員に国学院大学亀井正道・東京大学文学部中川成夫の諸氏を委任することを決定。同年8月16日、担当者及び調査員到着。8月17日、現地で鍬入式を行なう。宮田村長馬場一人・公民館長浦野虎雄氏の挨拶があり、発掘担当者大場博士より発掘上の注意が述べられ、続いて白心寺住職山田説勇氏による御祓の儀が行われる。作業は10時より東塚の中央南北にトレンチを設定する。そのほか補助にA~Gのトレンチを設けて調査に当る。発掘の協力は、宮田村青年会が各班に分れ交替で当ってくれる。この東塚は昭和18年南割少年団が、食糧増産のため、表土20~30cm開墾した。そのとき、墳頂部に近い南斜面80cm下に直刀、須恵器、管玉が発見されたことにより、開墾を中止し出土遺物は白心寺に保管を依頼する。東塚は事前にこうした経験があったことが、今回の調査の動機となったものである。8月18日に封土約半分に葺石があることが確認された。8月19日、東塚はついに主体部につき当らず調査は終ることになった。

中塚は、東塚と並行して調査が行われた。この塚は水田の中にあったので、周辺から削り取られていて、調査時点では径3m、高さ1.5m形ばかりの墳丘になっていた。後で聞いた話であったが、大正年代に盗掘があり勾玉・管玉などが出土地したという。おそらく、主体部は失なわれていたのではないかと考えられていたのである。

西塚は、調査が終る8月20日、トレンチ内より鉄鎌が発見される。さらに2.2m掘り下げるとローム層に掘り込まれた個所に、木棺埋葬の底部が発見される。この面から刀子・鉄鎌・須恵骨の一部と歯が発見された。実測して埋戻しを行い保存することになった。中塚は、その後、所有者が耕作に不都合であるから、墳丘を田の隅に移転して整いと云う申し入れがあったので、村ではほとんど破壊された塚であるから、移転も止むなしとして許可をしたと云う経緯がある。

2. 今回の調査は、6月26日~8月14日まで行われた。調査は墳丘の雜物を取り除き、現況の測量を済ませ、西側の水田の方向に耕土を除土する。地場下に周溝が発見される。昭和27年調査の時、埋め戻した主体部の再発掘を行うことになった。

中塚は、封土を取り去られた位置が大方知られていたので、トレンチをこれと思うところに設定したところ、西塚と同様な周溝と僅かではあるが主体部が発見された。

東塚は、道路で削り取られた部分に対し、土を盛り復原する一方で、南側と北側を調査したところ、中塚・西塚同様、周溝が検出される。これによって三つ塚古墳全体に周溝が存在することが判明したのである。この事実により、東・中・西塚の規模を確認することができたのは、今回の調査の大きな収穫であった。

墳丘の築成

西塚は、大正年代までは東塚と同じ封土をもった古墳であったようであるが、昭和初年の駒ヶ原耕地整理工事の折、封土はほとんど取り去られたと聞く。しかも、古墳の中央部が所有権境であった関係で、上の田にあっては埋葬主体部掘込み上面から、水田の地場とされたようである。下の水田は棺が埋葬されている面まで土を取り去ったので上の田との比高は1.75mを測る。従って旧封土の状態を知ることはできない。幸い、周溝が発見できたので、墳丘の径を測定することができた。西塚の径は11.2m、周溝の巾3m、深さ80cm測る。墳丘の状態は現存している東塚と同じものであったであろう。葺石が存在したかどうかは確認できなかったが、残存した墳丘と周溝内に認められた頭大から拳大の自然石は、おそらく葺石ではなかろうか。

中塚、本塚は西塚と同様、大正年代には東塚と同様であったと伝えられている。西塚同様、駒ヶ原耕地整理の折、五分の一程に削り取られてしまったものを、昭和30年頃水田の所有者から、古墳が水田の中央にあり、耕作上大変に不便であることと、墳丘が殆ど消滅していると云う理由で、墳丘を西北の田の隅に移して欲しいという要請が村教育委員会にあり、文化財専門委員会で研究した結果、移築しても支障がないと云う結論を出し移築したのである。移築の折、封土の調査ができなかつたのは残念であった。しかし、今回の調査で計らずも、周溝と主体部を発見でき得たことは、予想だにしなかつたことであった。これによって、本古墳の径は11.5m、周溝の巾平均2m、深さは調査時点40cm内外であったが、おそらく、西塚ぐらいの深さがあったのではないかろうか。

東塚。本古墳は今回の調査外であったが、三つの塚の関連性から周溝の有無を調査したところ、南側と北側に西塚・中塚と同様な周溝が検出されたことは、予想もしなかつた収穫であると言わなくてはならない。このことにより、本塚の規模は平均径16m、周溝の巾約2m、深さはロームの切り込みから30~50cmを測る。本塚も長年の間に道路や耕作のため変形してしまったので、原形に近く復原を試みた。現在三つ塚古墳は、東塚一基を残すのみとなってしまったのである。

主体部

西塚は、昭和27年の調査の折、不十分であったが主体部の調査が行われたので、その概要を記し、今回の調査と合せて完了したことにしておきたい。前回の調査では、南北3.6m、巾50~60cm、深さ1.6~1.7m、底部は10~20cm凹められた舟形底である。底部の底に二本の枕木が置かれたらしい、その痕跡が残っていた。おそらく、半地下式の土塙墓とされていた。出土遺物は、土塙内の埋土中より鉄鎌と縄文中期の土器片の出土をみた。土塙の底部凹みの東側に刃部を外側に向かた鹿角の刀子が検出された。また、両側凹に密着して鉄鎌が発見された。中央北寄りの小ビットより僅か南に頭蓋骨片と頭骨の一部及び歯が検出された。骨片は発見時、形をなしていたことは確認し得たが、取り上げは不可能な状態であった。前回の調査では以上のことを確認して終了した。

今回の調査では、前回埋戻された土を掘り上げ精査したが、出土遺物は検出できなかった。前回土塙内の調査不十分の個所を完全に精査して実測図を作成した。

中塚・本塚はほとんど消滅したと考えていたのであるが、念のため位置の確認をするトレンチを設け調査したところ、周溝の一部と主体部が検出されたことは、まったく予想されなかつたことで、

これもまた、大きな成果の一つである。主体部の規模は南北3.2m、巾60~70cm、深さ15cmを測るが、主体部の上部はほとんど削り去られて、底部だけよく残ったと言う程である。しかしながら、これだけの底部が残したことにより、本塚のあらましを推定することが出来たことは、大きな成果と言わざるを得ない。遺物は、鉄器の残片が中央や々北寄りに、頭部の位置と考えられる辺に、ほとんど土色に近い迄に腐蝕した骨が発見されたが、取り上げられない状態であった。しかしながら、骨であると言うことだけは確認された。本塚も西塚と同様、木棺直葬の古墳である。

周溝内出土の遺物（第27図）

西塚の周溝内に発見された遺物は、墳丘中心から南西の方向に当る周溝の墓中心部に位置している。遺物の出土の状況は、周溝の底から5~10cmの黒色土中に検出された。遺物は土師の高壙3、須恵の高壙1、土師の壠1点、他は復原不可能の破片多数が、一平方メートルほど内の内に集中して発見された。その他の遺物の分布は、ほとんど縄文中期の土器片である。

中塚の周溝内から発見された遺物は、主体部の東側に3個所にわかれて検出された。出土した状態は、周溝の底から15~25cm高い位置の黒色土中から出土した。遺物は土師の高壙2、土師の壠1。

東塚の周溝内から発見された遺物は、墳丘の南側から南西の方向にわたって3個所に集中して検出された。遺物は周溝の底部から10~20cm上の黒色土中から出土した。遺物は須恵器2、須恵高壙1、土師壠1、土師小形丸底壠1、土師高壙6点と復原不可能の土器片多数が発見された。三つ塚古墳の三基から同じ状態で祭祠遺物が出土したと言う点は、大変に興味深いことである。今後古墳祭祠の上で重要な資料を提供してくれた。

出土遺物(1)

1. 前回出土した遺物

(1) 東塚より出土遺物は、直刀1、戰時中発見されたもので、発見地点は東塚頂部より南傾斜で、深さ80cm程の所より出土したと伝えられているもので、発見の詳細については不明である。刀身は約70cm、茎の長さ20cm、刀身の幅4cmである。厚みは3mmを測る。茎には釘孔がある。刀は両刃作りである。刀先は折れてしまっている。



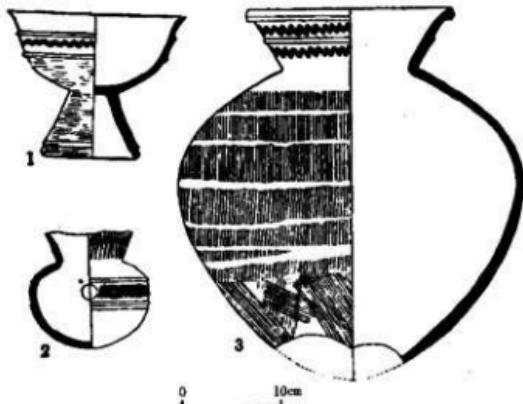
第22図 東塚出土直刀

須恵器（2図）

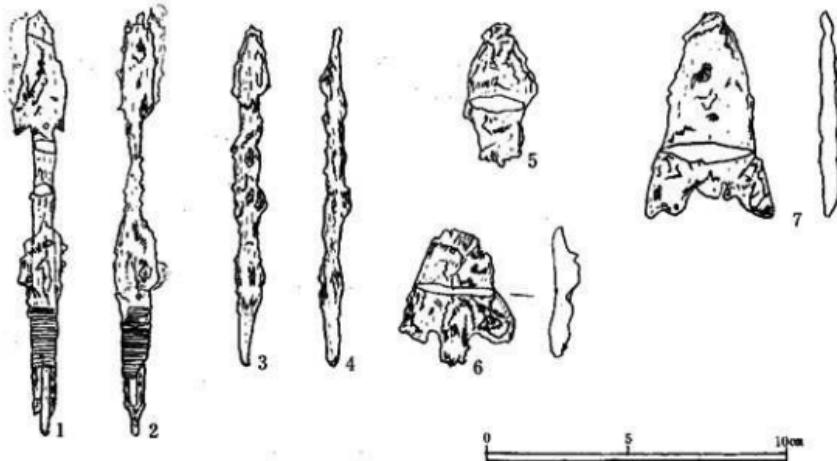
1.1.は、出土時期が不明であるが、東塚から出土したことは確かである。口径17.7cm、高さ14.4cm底径10cmを測る高環である。2.は口縁部が破損しているので測定は不可能である。胴部の径は11.7cm、丸底の壺である。3.は口径21cm、胴部の径34.5cm、高さ37cm、丸底の壺である。

鉄鎌（3図）

1.2.は、尖根の鎌である。破損が甚しく正確な測定は困難である。長さ15.3cmを測る。茎部を麻糸と思われる絲で巻てあるのが残存している。3.4.は、鋤が甚しく原形を想定しかねるもの、長さは11.5cmを測る尖环である。5.6.は、平根鉄鎌で破損が甚しい。7.は正根鎌で、茎部を欠損している。



第23図 東塚出土の須恵器



第24図 西塚出土の鉄鎌

出土地点は主体部の棺の左側より発見されたものである。

鹿角の刀子

西塚より出土したもので、発見は昭和27年の発掘時である。検出した地点は主体部の両側床面上である。鹿角の柄の部分 6.9 cm、刀身 9.7 cm、厚さ 7 mm を測る。刀身に一部木片が付着しているのは、鞘の残部ではないか。その木片の内側から布が検出された。おそらく、鹿角の刀子を巻いた麻布であることが確認された。このことは、平安遺文の宮田の麻布との関係において重要なこととなつた。

埋葬遺体の歯牙について

- 一、完全に原形を止めているものは皆無であるが、珐瑯質は長い年月たっても侵され難いためか、珐瑯質のみ歯冠の原形を止めていたもの 3。歯冠の三分の二以上を失い僅かに形態の判別できるもの
- 2、冠内象牙質と思われるもの 1、上顎歯白歯根と思われるもの 1、全く判別し難い骨質（歯牙を含む）1。歯冠により部位の判別できたものは、左上顎第二大臼歯、左上顎第一大臼歯、左下顎第二小白歯、左下顎大歯（三分の一）のみ。上顎第一大臼歯（四分の一）
- 二、形態解剖的な形態を附与されていて、わずかにのこった下顎大歯より、シャベル型歯牙の徵候を知ることができる。珐瑯質は、色調はやや褐色を呈し光沢には変化を認めないが、珐瑯接枝の走行に非常に稀弱性を持つ、長年月のため膠様間質が風化されて居るためと考えられる。象牙質、黒褐色に変化し色沢共に全く原形を止めていない。象牙細管は萎縮し体質は原形の二分の一となり、象牙細管の走行状態は肉眼で判明できる。白亜質、殆んど侵されてはっきりとし難いが、薄いやや褐色の膜状となって僅かに認められる。歯軸腔、点状小孔となって認められるが、根管腔に至っては、象牙細管の走行により認められるのみにて腔隙はない。歯冠の咬合状態となった歯槽骨と歯根との間に四分の一 mm ~ 1 mm の空隙がある。骨は全く土色を呈し海綿状の空間の中には、土質が入り判別し難い。

食物と年令

文明が発達するにつれて、人間生活も複雑化し摂取する食物も比較的に食べよい物になってきた傾向は周知のことであるが、発見された歯牙について今日の日本人の咬合状態を標準に考えると、45才以上の咬合状態を呈している。現代人のその年令状態から考えて必ずあると思われる咬合裂溝の齶歯が認められないということは、硬度に富んだ物を常食としたと言うことになるのである。従って、咬合状態の標準がもっと若い方にずれていることは考えられるのである。口腔衛生の立場から、古墳時代の人は齶歯が少なかったとの統計より、歯牙に対して為害作用の強い酸類の摂食が少なかったとも云えるのではなかろうか。

註 北京人の歯牙に見られる (Hadilich Dahlberg Pererscoo) により研究せられ、モンゴリアン系人類の特性であると意見の一一致を見ている。 調査者・昭和病院 西沢 孝

出土遺物(2) 一西塚一 (図10W 1~5)

遺物は周溝内に廃棄された一括出土の土器のみである。土師の高環3点、甌1点、須恵器の有蓋高環1点が出土している。W-1~3の高環は環部内外面に入念なヘラ磨きを施し、内面を黒色処理したもので、丁寧な作りである。甌(W-4)は高環同様器面外面と頸部から口縁までの内面に入念なヘラ磨きを行い内面を黒色処理している。須恵器の高環(W-5)は環部底部を時計まわりにヘラ削りしている。脚部に透しはない。(細部の観察は巻末の表に記し、本文中では省略する)。土師器は鬼高I式期の要素を多分に含んでいると考えられるが、それ以上の限定は今のところ成し得ない。土師の高環は駒ヶ根市赤穂上赤須、中通り下遺跡・古墳出土のものに酷似している。(註-1) 須恵器の高環は、陶邑編年(註-2)のMT15あたりに比定でき、6世紀前半のものと思われる。

註-1 駒ヶ根市教委 「中通り下遺跡」 1979

註-2 平安学園考古クラブ 「陶邑古窯址群I」 1966

一中塚一 (図10 M-1~3) (図10 W-1~5)

遺物は西塚同様、周溝内廃棄の一括土器のみである。土師の高環2点と丸底の盤が1点出土している。高環(M-3)は口縁の外反が強く、脚部の調整、形状等に若干古いとも思われる様相を残している。3点共、いづれも内面に黒色処理が行なわれている。

土師器は鬼高I期のカテゴリーに含まれるが、それ以上の限定は成し得ない。

一東塚一 (図10・11 E-1~11)

今回の調査では土師の甌・小型丸底甌、各1点、高環6点、須恵器の無蓋高環1点、甌2点が出土している。いづれの個体も他の2つの古墳の遺物に比べて、残存部位の割合が低い。

小型丸底甌(E-2)は上半部を検出していないため、小型直口甌の可能性もある。土師の高環は環部の形状と脚部外面の調整手法からA類(E-3~5)とB類(E-6~8)に分類できる。A類は、ヘラによる調整が目立ち、B類は、木目の細かう刷毛状工具による調整が主体である。A・B類共に環部は内外面共に刷毛状工具および指による横ナデが最終段階の調整であり、共に内面への黒色処理はなされていない。

土師器は、いづれも鬼高II式期的な要素が強いと考えているが定かではない。

須恵器の甌(E-10)は、頸部と胴部の接合部位を未検出のため、実際の頸部長は、もう少し長くなる可能性がある。胴部の隆が目だたず丸みを帯びた作りである。無蓋高環(E-9)は、脚部三方に長方形の透しを設けている。

須恵器は、いづれもTK23~47(註-2)あたりに比定できるであろう。

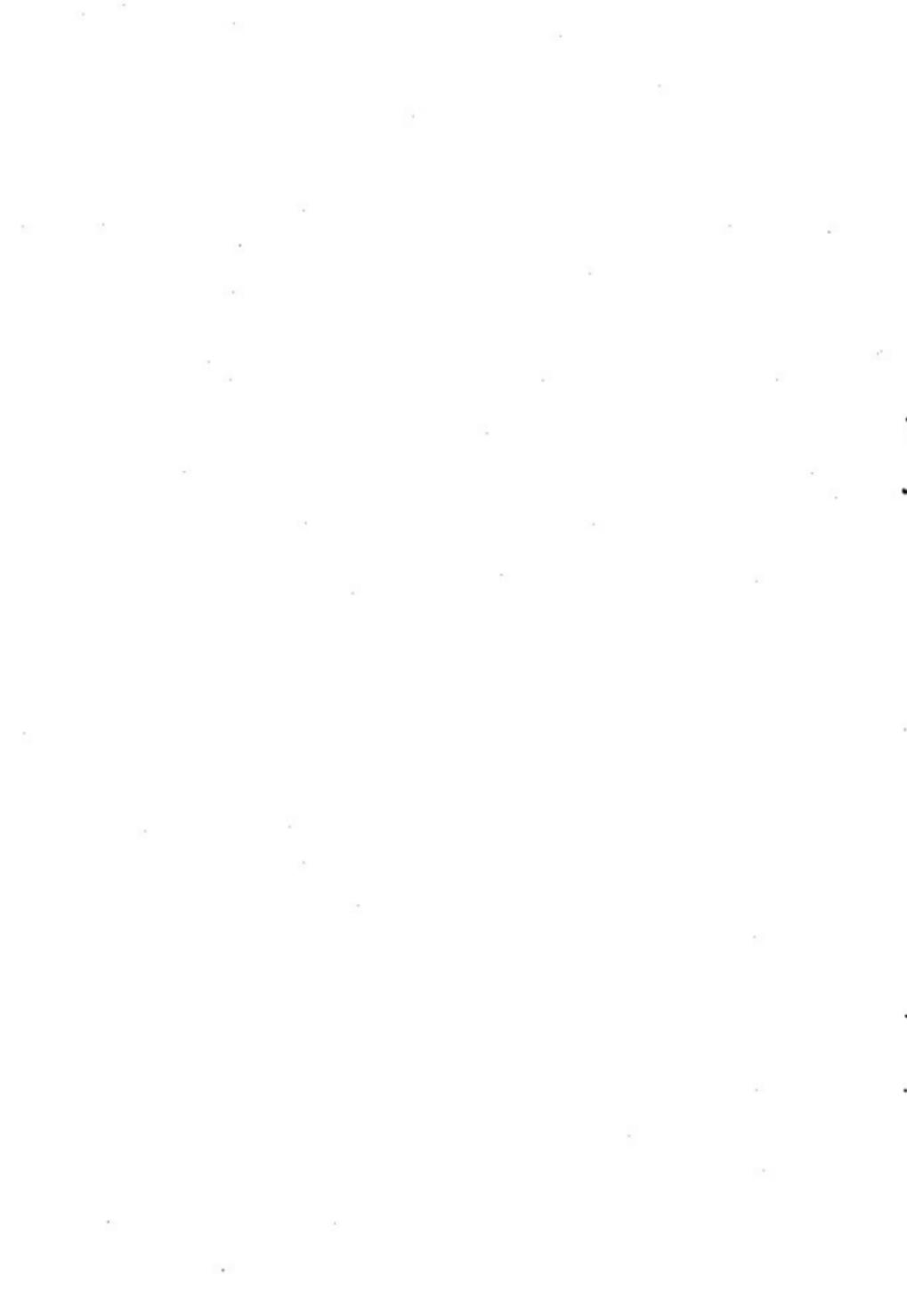
参考文献

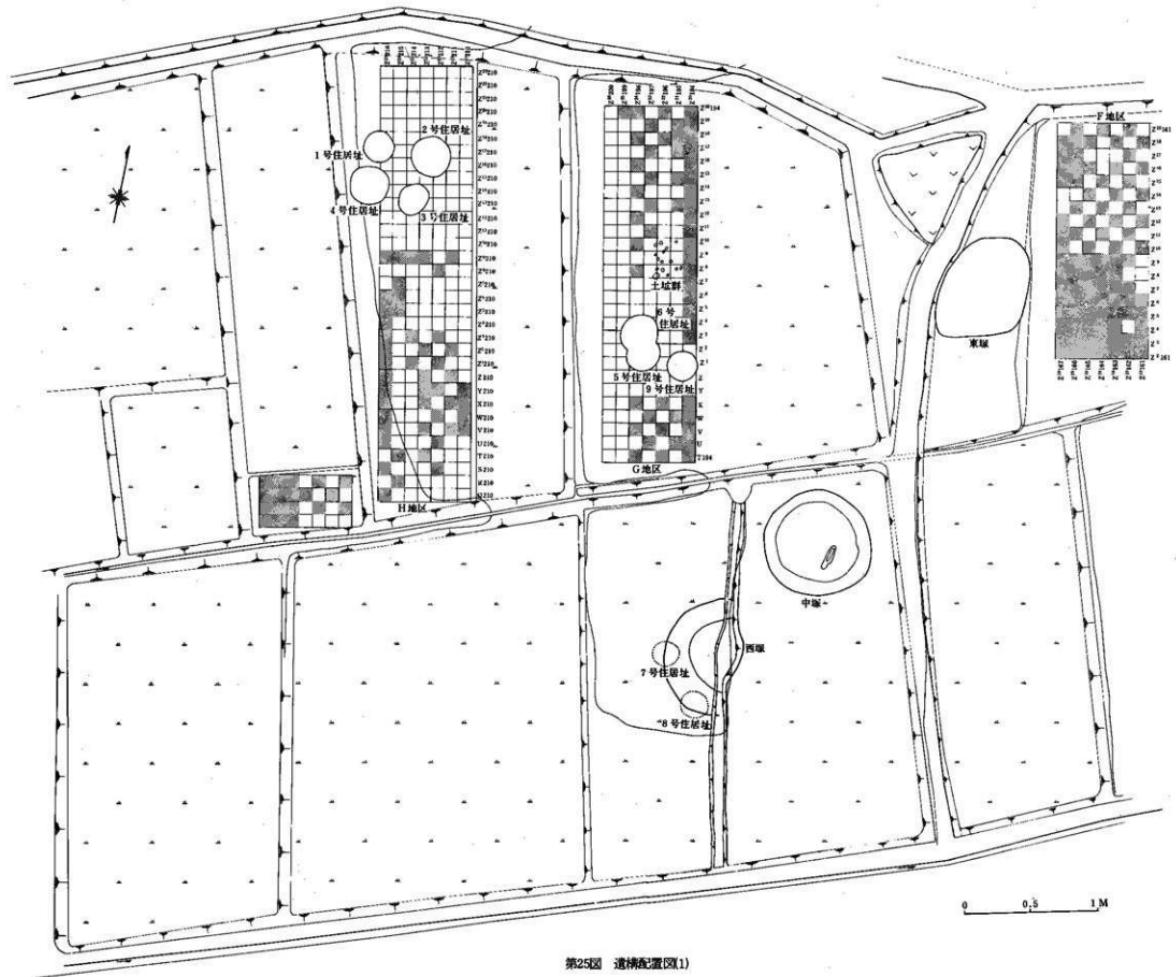
- 岩崎卓也 「東日本における土師器の研究」 1963
- 笹沢 浩 「信濃における鬼高式土器の開始」『信濃20-3』 1968
- 宮沢恒之 「飯田地方の土師器の様相」 『信濃20-11』 1968
- 桐原 健 「信州における古式土師の位置」 『信濃19-8』 1967
- 大場磐雄 「宮田三つ塚古墳発掘概報」 『宮田村教育委員会』 1952

出土遺物一覧表

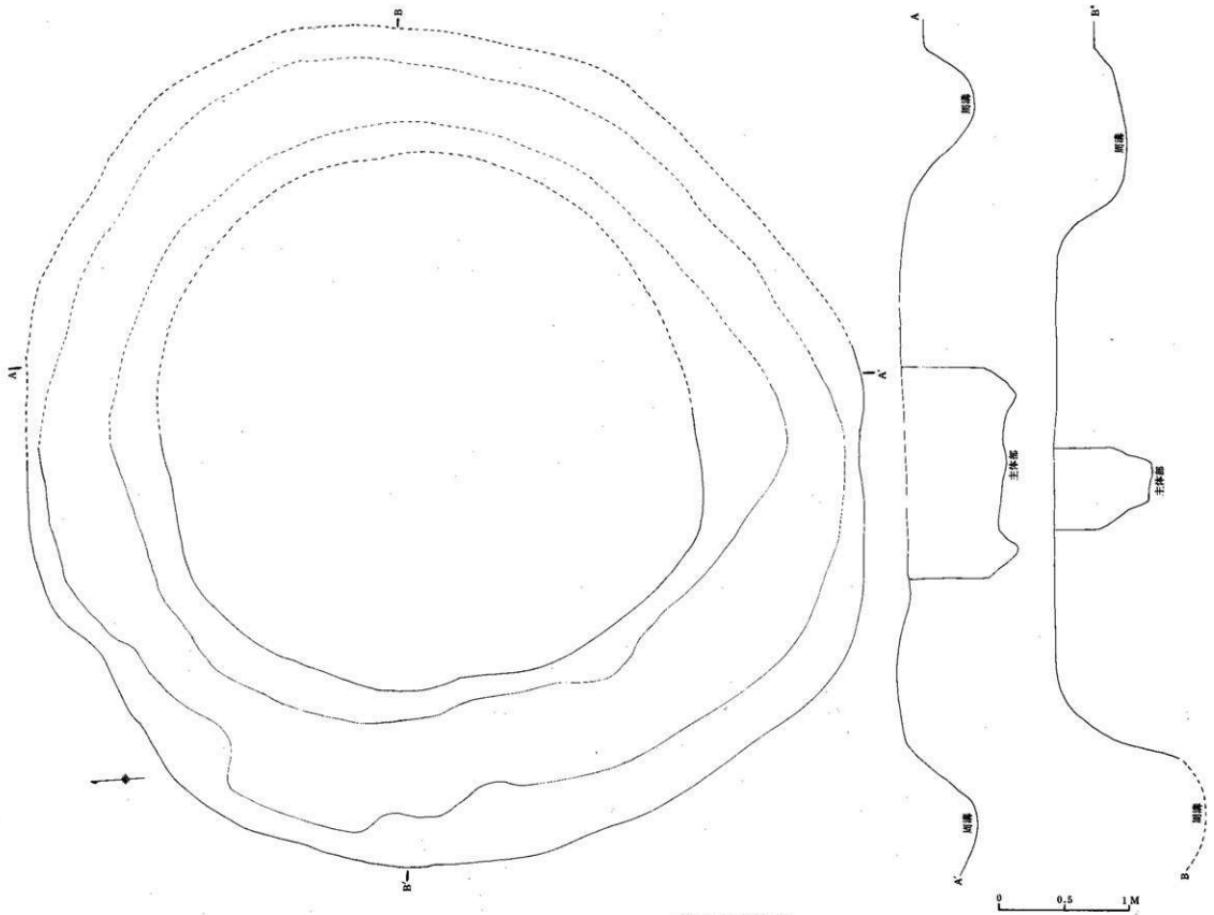
| 出土地 | 排回番号 | 種別 | 器種 | (cm) 器 高 | (cm) 口 径 | (cm) 底 径 | 色 調 | 胎 土 | 保存状況 | 器 蓋 調 整 他 |
|-----|------|----|--------|----------------|----------------|----------------|--|--|------|--|
| 西 塚 | W-1 | 土師 | 高环 | 9.8 | 14.7 | 11.2 | 体部内面と口 部外面に黒 色処理 その他の部位 赤褐色 | 1mm前後の石 英、長石を含 む 精製(水ごし) 粘土の可能性 が高い | 約70% | 口唇外面・ヘラ磨きの後模ナデ 体部外面・小ささみなヘラ磨き 体部内面・ヘラ磨き 脚部外面・上部はヘラ磨きの後ナデ、 下部はヘラ磨き 脚部内面にしづり痕が残る |
| | W-2 | 土師 | * | 11.6 | 15.2 | 11.3 | * | * | 約70% | 体部外面・小ささみなヘラ磨き、一部 に前段階のヘラケズリ痕が残る 体部内面・ヘラ磨き 脚部・ナデ、一部に木目の細かいハケ 状工具による回転調整痕が残る 脚部内面はヘラケズリの後ナデ |
| | W-3 | 土師 | * | 8.9 | 10.2 | 7.2 | * | * | 約80% | 体部外面・内部 脚部外面・ヘラ磨き 体部外面の一部に前段階のヘラケズリ 痕が残る 脚部内面・ヘラケズリの後ナデ |
| | W-4 | 土師 | 壺 | 6.3 | 7.2 | | 外面明るい赤 褐色 内面黑色処理 | 精製(水ごし) 粘土 | 約90% | 内、外共に密なヘラ磨き |
| | W-5 | 須恵 | 高环 | 10.4 | 10.5 | 9.2 | たちあがり部 以外、全面に 自然釉付着 | | 光 滑 | |
| 中 塚 | M-1 | 土師 | 瓶 (残存) | 8.3 | 丸底 | | 外面赤褐色 内面黑色処理 | 1mm前後の石 英、雲母を含 む | 約40% | 外面・横ナデ、下部に指頭圧痕が残 る 内部・ヘラガキ |
| | M-2 | 土師 | 高环 | 12.5 | 16.3 | 12.1 | 外面褐色 内面黑色処理 | * | 約60% | 体部外面・ナデ、口唇部にヘラミガキ が一部残る 体部内面・ヘラ磨き 脚部・組み合わせ部に、シボリ 脚部外面・ヘラケズリの後ナデ 脚部内面・ヘラケズリ |
| | M-3 | 土師 | 高环 | 9.9 | 16.5 | 10.9 | 体部内面と口 唇部外面に黒 色処理 その他の部位 赤褐色 | 1mm前後の石 英、雲母を含 む | 約70% | 体部外面・全面横ナデ(回転調整痕が 残る)一部ヘラミガキ 体部内面・ヘラ磨き、組み合わせ部に シボリ 脚部外面・ヘラケズリの後ヘラミガキ その後、ナデ消し 脚部内面・ヘラケズリ |

| 出土地 | 排岡番号 | 種別 | 器種 | (cm) 器 高 | (cm) 口 径 | (cm) 底径 | 色 調 | 詰 土 | 保存状況 | 器 面 調 整 他 |
|-----|------|----|---|----------------|----------------|------------|-----------------|-------------------|------|--|
| 東 墓 | E-1 | 土師 | 盃 | (残存) 12.7 | (復元) 12.5 | | 明褐色 | 1.5mm前後の 砂粒を含む | 約40% | 内、外面共にヘラ磨き |
| | E-2 | 土師 | 一小 型 丸 壺 (複 数 個 ?) | (残存) 8.1 | 不明 | | 外面明褐色 内面黑色処理 | ち密、雲母を 含む | 約30% | 外面・ヘラ磨き 内面・ヘラ磨き、一部ナデ |
| | E-3 | 土師 | 高环 (A) | 9.5 | 14.0 | 10.5 | 明褐色 | 1mm前後の石 粒を含む | 約50% | 体部外面・刷毛状工具による回転調整 その上をナデ消している 内面・横ナデ 脚部外面・ヘラケズリ、刷毛状工具に よる調整。その上をナデ 脚部内面・ヘラケズリの後ナデ |
| | E-4 | 土師 | 高环 (A) | 9.3 | 13.9 | 9.6 | * | * | 約60% | 体部外塗、内面はE-3と同じ 脚部外面・ヘラケズリの後ヘラミガキ 脚部内面・ヘラケズリ |
| | E-5 | 土師 | 高环 (A) | 不明 | 13.2 | 不明 | * | * | 約50% | 体部外面・ヘラミガキ(ケズリ)の後 ナデ 内面・ヘラケズリの後ナデ 脚部外面・ヘラケズリ |
| | E-6 | 土師 | 高环 (B) | 12.7 | 16.8 | 10.3 | 暗褐色 | 1mm前後の砂 粒を含む | 約40% | 体部外面・本日の細かい刷毛状工具に よる調整。一部にヘラ磨きが残る 体部内面・刷毛状工具による回転調整 その上をナデ 脚部外面・報ハケ(本日の細かいもの) その上をナデ、一部に指痕圧痕が残る |
| | E-7 | 土師 | 高环 (B) | 不明 | 16.8 | 不明 | * | * | 約60% | * |
| | E-8 | 土師 | 高环 (B) | 不明 | 16.9 | 不明 | * | * | 約30% | 組み合わせ部に指痕による絞り痕が残 る。他はE-6と同じ |
| | E-9 | 須恵 | 無蓋 高环 | 7.9 | 11.7 | 7.8 | 灰白色 | | 約40% | |
| | E-10 | 須恵 | 甌 | 不明 | 14.3 | | * | | 約20% | 口唇部、頸部にクシ書き波状文、胴部 に列点文 |
| | E-11 | 須恵 | 甌 | 不明 | 9.0 | | * | | 約20% | 頸部にクシ書き波状文 |

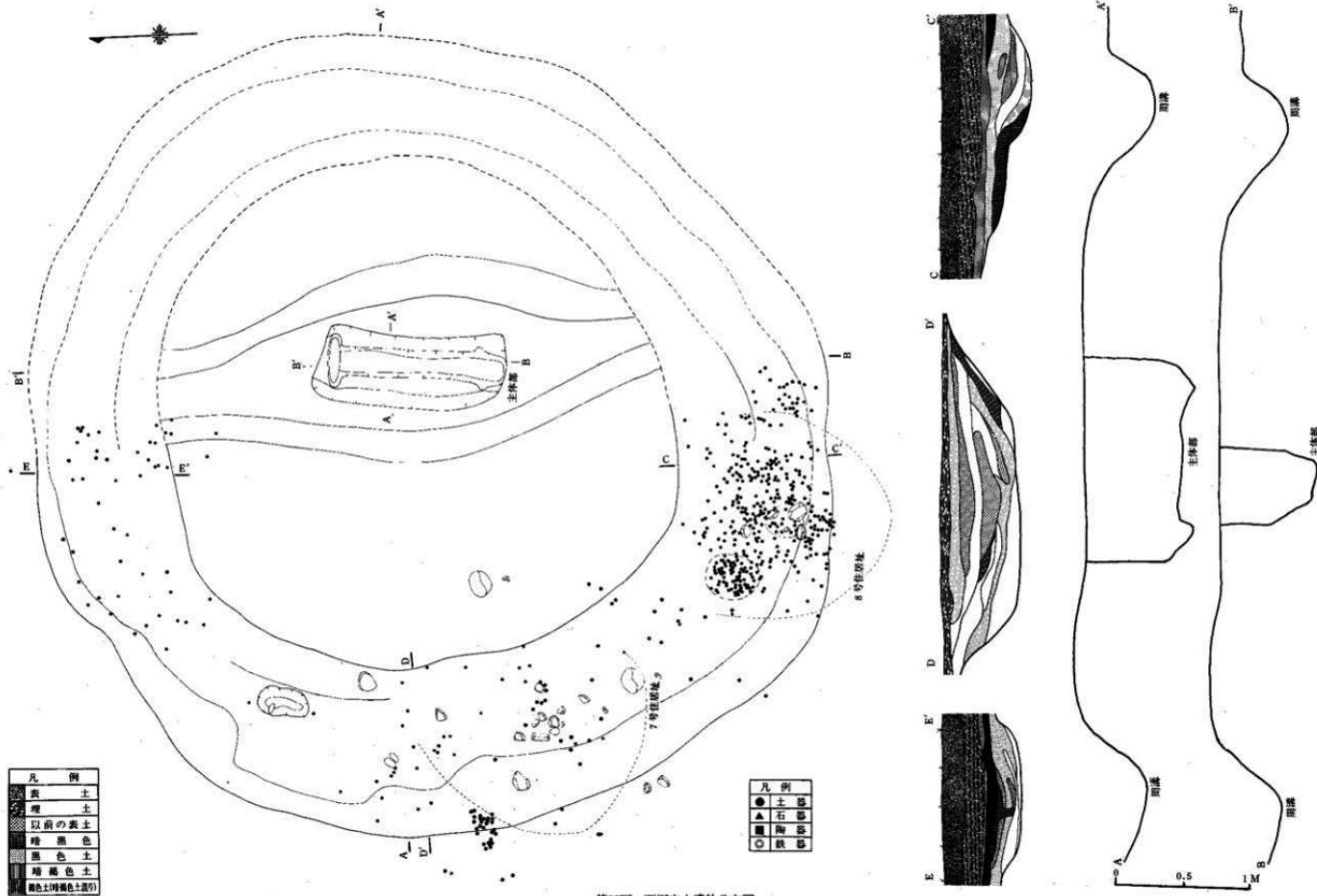




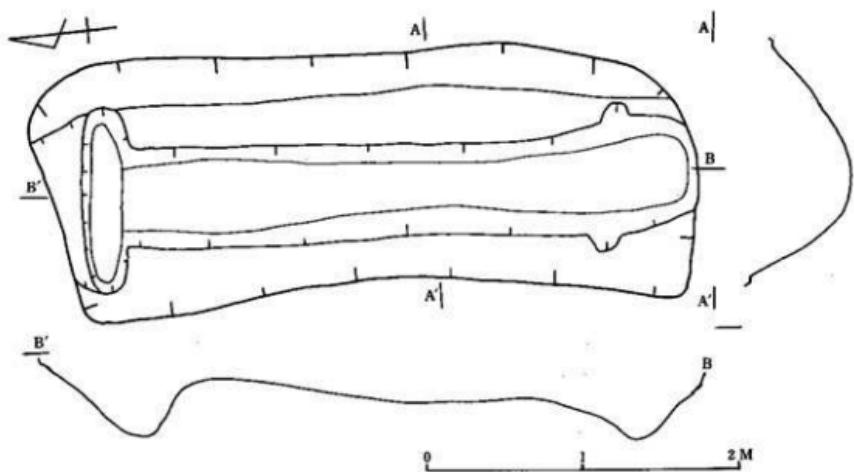
第25図 遺構配置図(1)



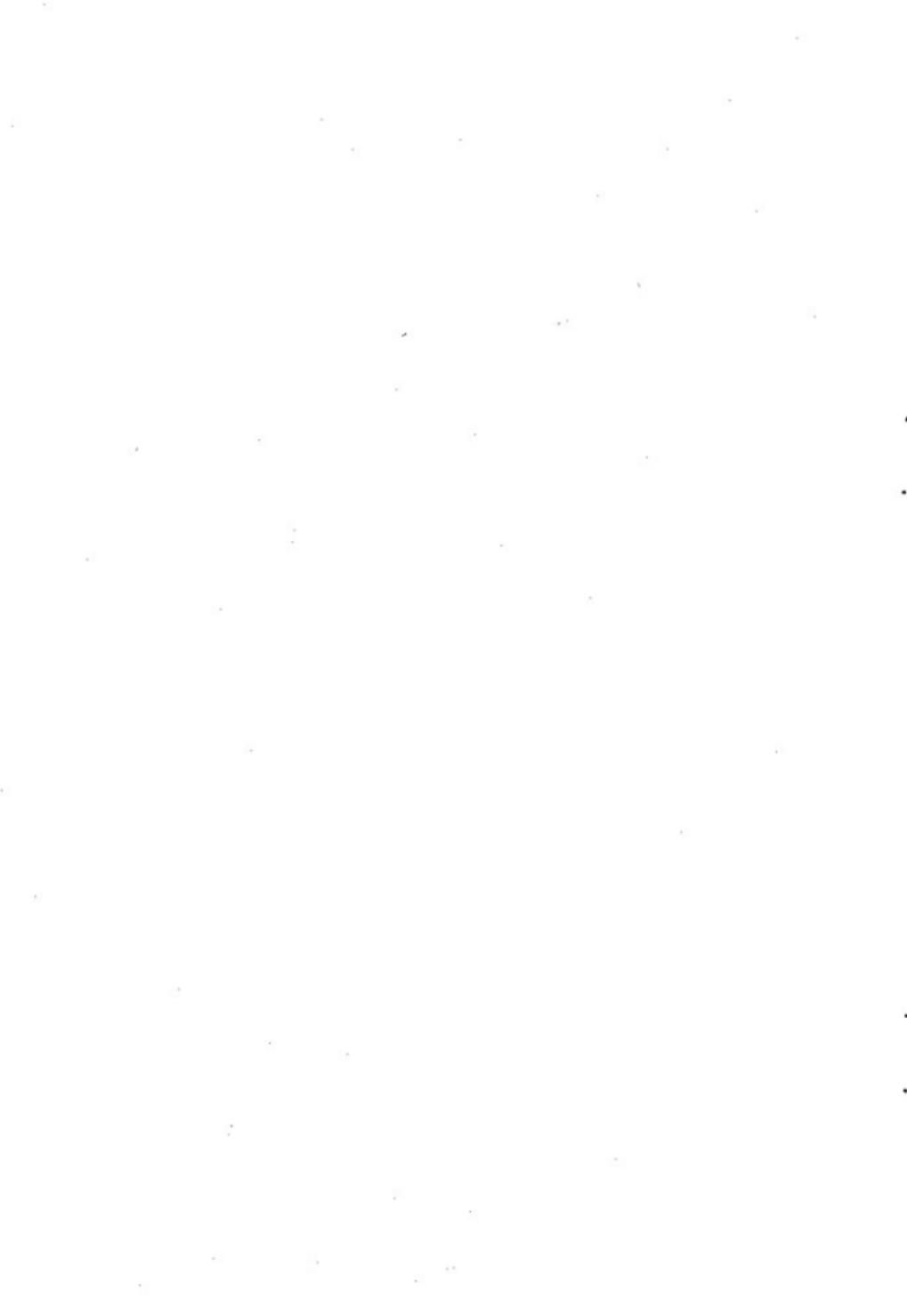
第26图 西塘吴墓图

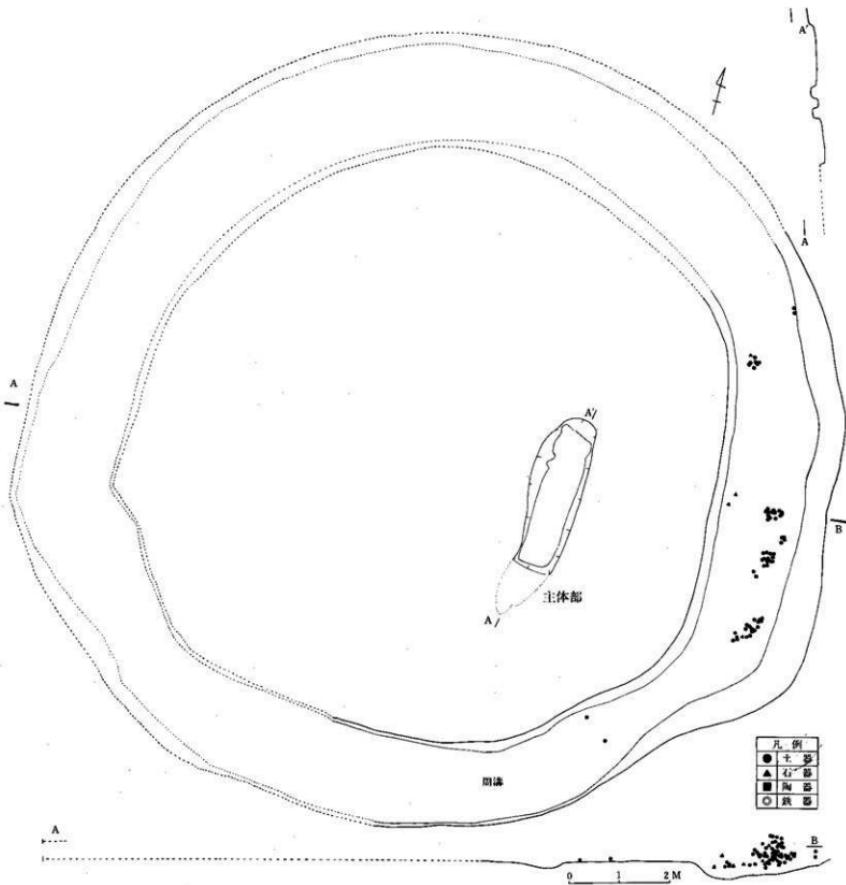


第27図 西塚出土遺物分布図

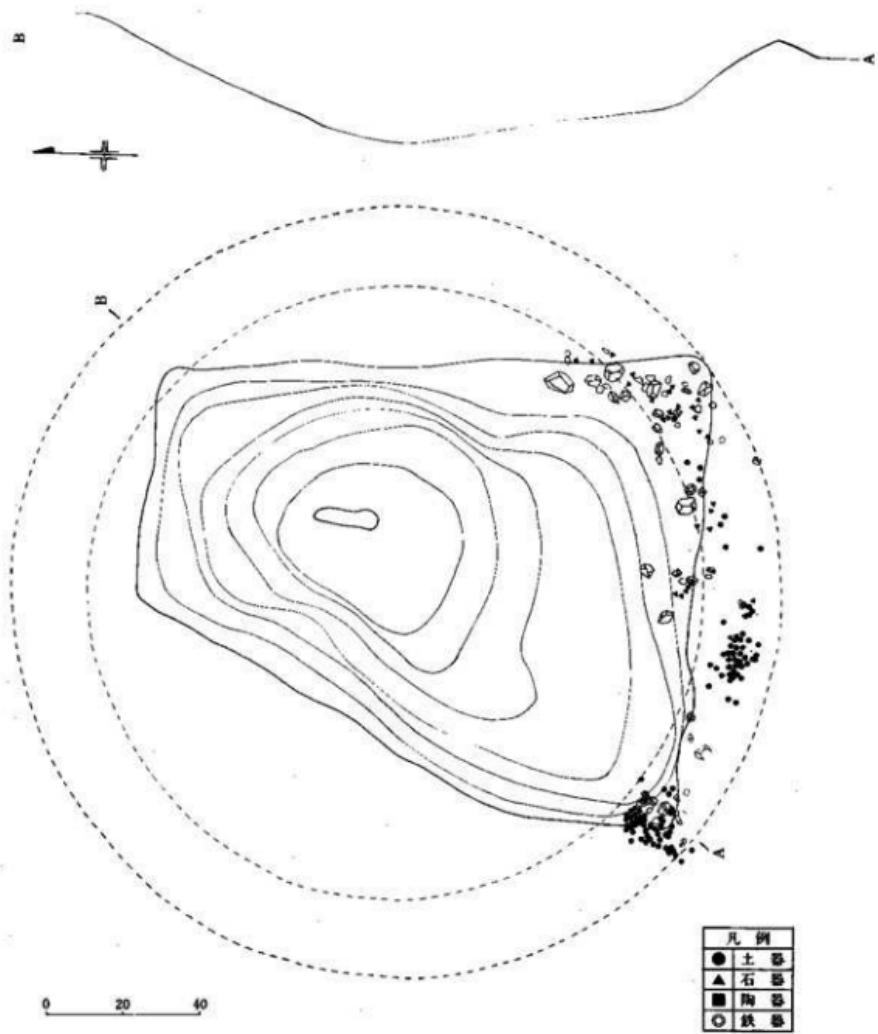


第28図 西塀の主体部実測図

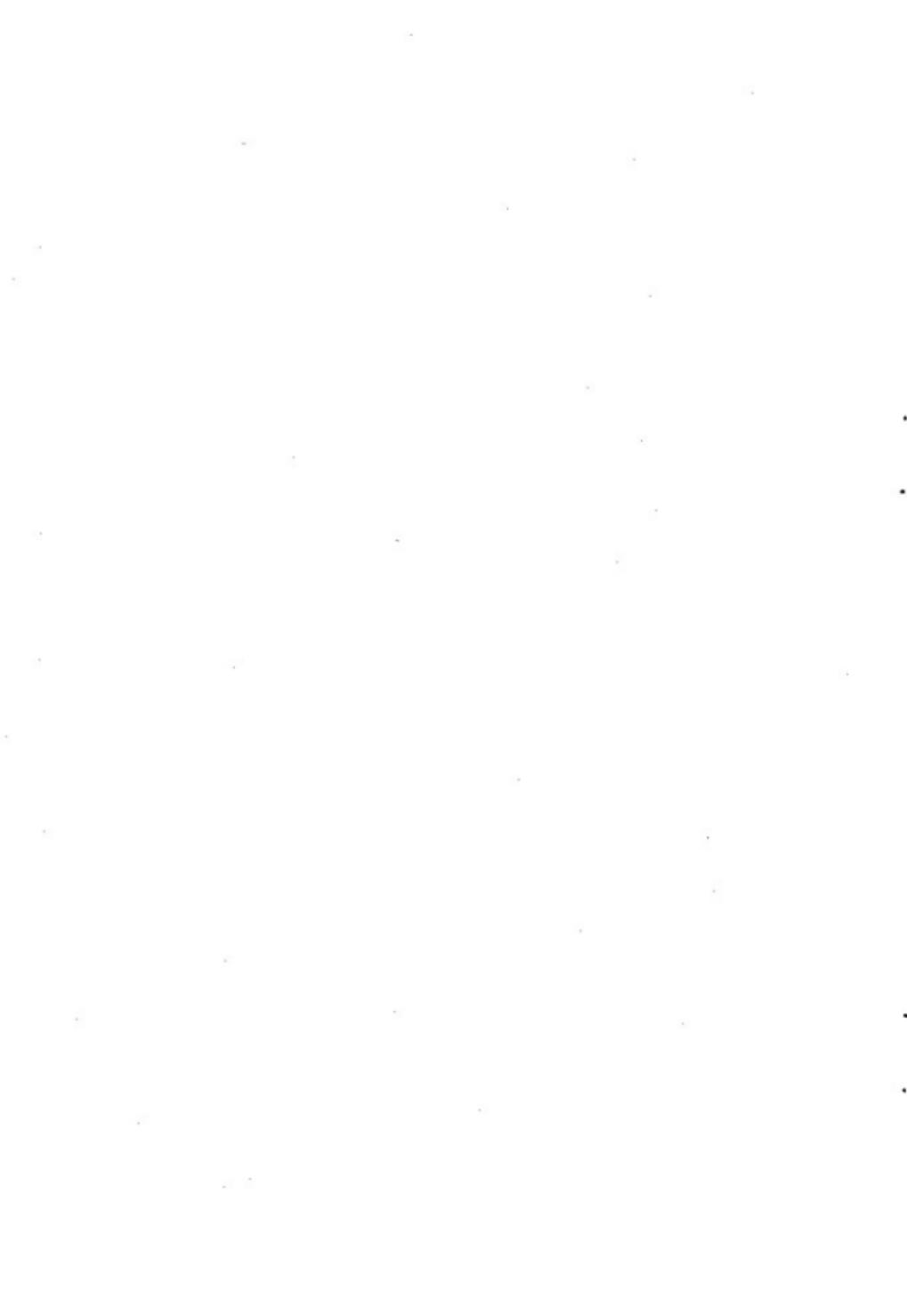


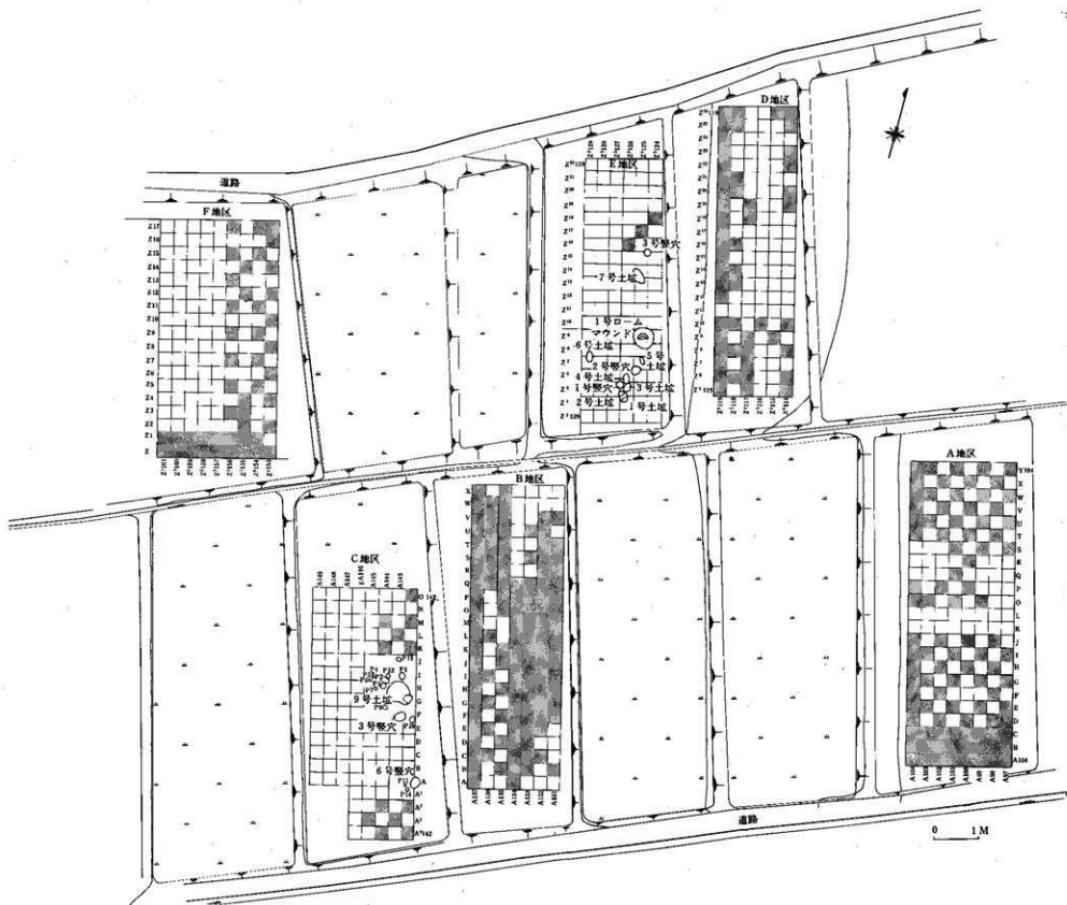


第29圖 中塚実測図

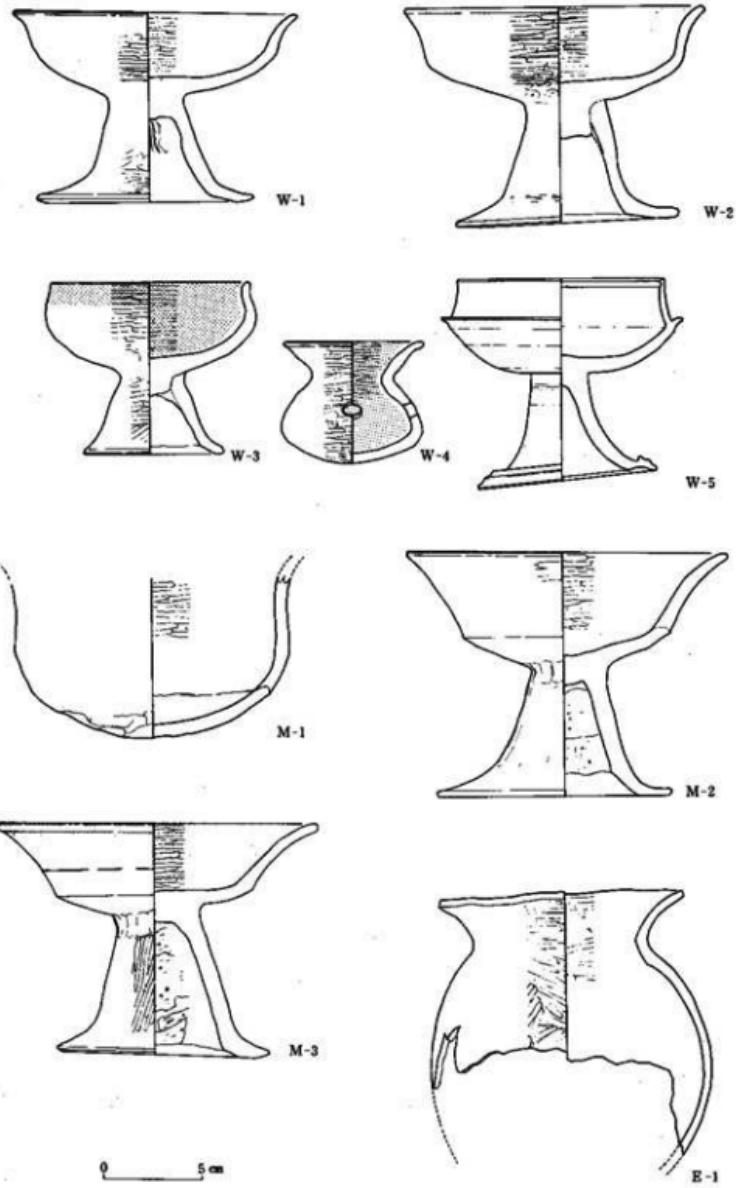


第30図 東塚実測図

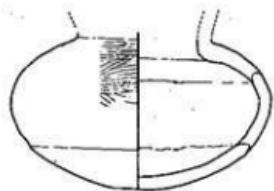




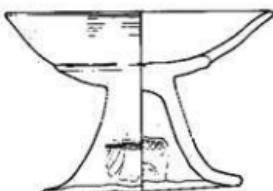
第31図 A・B・C・D・E・F調査地区



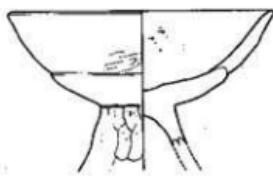
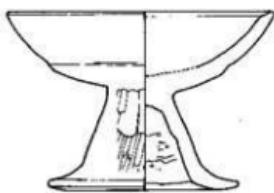
第32図 西塚出土土器(1)



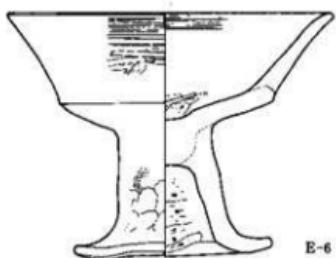
E-2



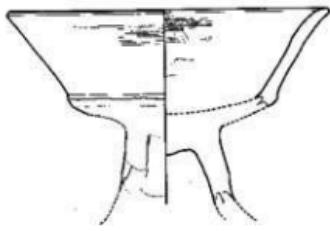
E-3



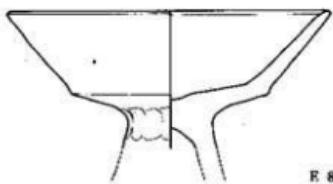
E-5



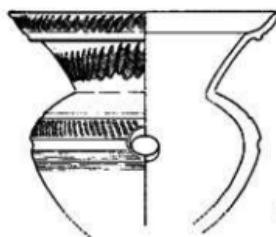
E-6



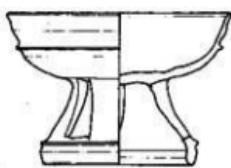
E-7



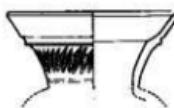
E-8



E-10



E-9



E-11

0 5 cm

第33圖 西塚出土土器(2)



発掘前の西塚



西方から見た西塚



北方から見た西塚





東塚周溝遺物出土狀況



西塚周溝遺物出土狀況



西塚周溝遺物出土狀況



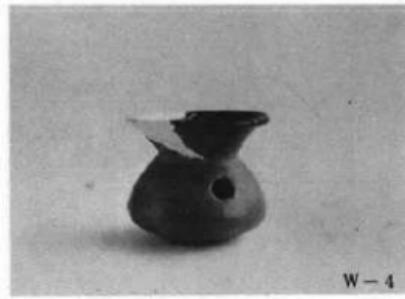
W-1



W-2



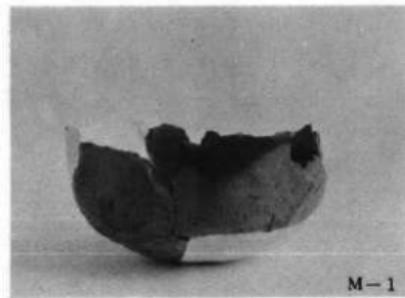
W-3



W-4



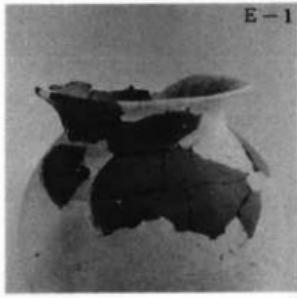
W-5



M-1

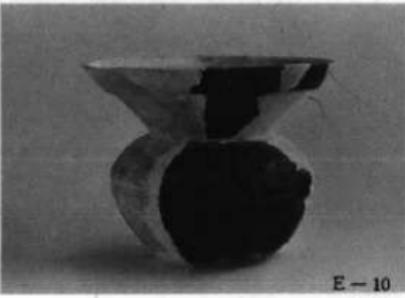
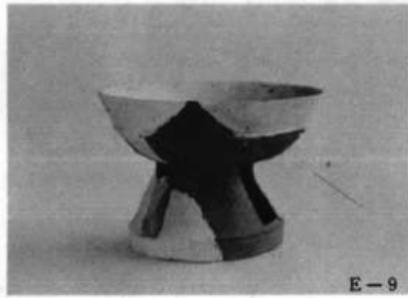
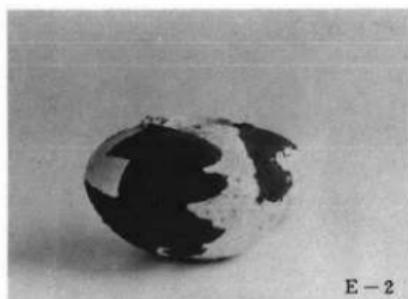


M-2



E-1

第37図



第38図

V まとめ

1. カラス林遺跡

本遺跡は、県営圃場整備事業に伴う緊急発掘記録保存である。調査の結果縄文中期中葉～後葉の住居址5軒・土塙8基・ロームマウンド1基・溝状遺構1個所の調査が行われた。

本遺跡は、駒ヶ原台地のほぼ中程、小田切川右岸段丘上に占地している遺跡である。遺跡の南側は、浅い谷状の凹地に近接している。この凹地を作った流れは、下流に至って大久保郡状地を形成したのである。この凹地は駒ヶ原耕地整理の折埋立ててしまったので、現場にあっては、その面影を窺うことはできない状態となっているが、古代にあっては重要な環境であったに違いない。また、北側は小田切川の右岸段丘上に当り、遺跡面と小田切川の河床との比高は10m内外と底く、段丘下は、湧水が豊富であった。この様な自然環境は、ここに住居した人々の生活の絶対的条件であったにちがいない。

2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺物としては、縄文中期初頭に当る遺構はついに発見でき得なかつたが、グリッドから平出3A式の土器小破片が僅か検出された。また、縄文中期中葉では第2号住居址が井戸尻期の住居址である。縄文時代中期後葉では、第7号住居址曾利II式期。第6・8号住居址は曾利II～III式に比定されるものと考えられる。第1号住居址は第6・8号住居址よりやや新しくIII式後半に位置づけられよう。以上カラス林遺跡は、縄文中期初頭から中期後葉に亘っている遺跡と考えられる。

今回の調査では、これら各時期にわたる集落の状態を知ることはできなかつた。

3. 土塙 今回の調査では8基の土塙が発見された。これ等の土塙は主に住居址附近に集中しているところから、住居址に関係が深いと考えられるが、遺物が大方の土塙に伴はなかったので、確実な時期を裏付けることができなかつた。土塙の形態は、Aが1・4号で大形階円形舟底形、Bは3・5・10号で中形階円形舟底形、Cは小形階円形7・11号の三種類に分類することができる。使用上については貯蔵穴・土塙墓等が考えられる。

4. 溝状遺構 本遺構は調査地区では南側湿地帯に接して発見されたものである。遺構の詳細については本文で述べられている通りであるので、ここではふれないが、湿地帯の附近の凹地帯の性格は、駒ヶ原耕地整理以前の地形を理解していないので、人為的なものと自然的なものとの区別が付かなかつたことが、溝状遺構の性格を曖昧にした原因であろう。

三つ塚古墳

1.三つ塚古墳と、集落について。このことについては多くの人が感心を持っていたが、これと云う研究はなされていなかつた。われわれの今までの調査などからは、古墳が営まれている駒ヶ原台地ではなく、小田切川と隔てた姫宮の段丘であろうと一般的に考えられていたし、古墳時代の住居址や遺物が発見されているので、大方はこのような考え方であったが、最近姫宮遺跡と同様の遺構が、三つ塚上遺跡から発見されたことにより、こうした考え方の一応再検討を要することとなつた。ここでは、まだまだ資料も不十分であるし、時間的に余裕がないので、後日の研究にまたなくては

ならない。

2.三つ塚古墳については元禄三年に行われた宮田村の検地帳に記載されているところから、江戸時代以前から、塚であることは知られていたようである。この三つ塚は東・中・西塚と名命され、今回は二回目の調査である。しかしながら、1回目の調査が関連するので、ここでは合せて報告する形をとることにした。今回は西塚が直接調査の対象となるので、西塚を中心に調査は進められた。

西塚は前回主体部の調査がなされたのであるが、時間的な関係で十分な調査がおこなわれなかつたので、今回の再調査となつたのである。調査の結果主体部からは、新しい遺物は検出されなかつたが、前回調査で不確実であった主体部の構造について、詳細に調査を行うことができた。特に大きな成果は周溝と周溝内より出土した土師器・須恵器である。周溝は古墳の規模を規定する上に重要であり、出土器物の土師高环・須恵高环は、古墳の時期の決定の資料と、祭祀のあり方などを考える上で貴重な資料を提供してくれた。

中塚 本塚も本文で述べた通りであるが、西塚で発見されたと同様な周溝の一部が確認されたことと、周溝内から土師器高环が発見されたことである。また、主体部の底部と人骨・鉄片等も検出されたことは、予想だにされなかつたことである。このことにより、本古墳は西塚とまったく同一条件の古墳であることが確認されたのである。

東塚 本古墳は今回の調査計画には入っていないのであるが、三つの古墳の関連を考える上で、周溝を確認するため調査したところ、中・西塚同様の周溝と周溝内から、土師高环・土師壺・須恵高环が検出された。このような調査によって、三つ塚全体の墳丘の規模と、主体部の形態・出土遺物による築造年代決定の資料が得られたことは、今回の調査の目的を十分果してくれることになつたのである。西塚で出土した須恵器よりMT-15期、土師鬼高Iの古い方。中塚は須恵器を欠いているが鬼高Iの古い方と考えられる。東塚はT K-47に比定できると考えられる。壺は鬼高I～IIに移行する時期と考えられる。また、東塚は副葬品など疑問の点があり今後検討を要する面も残されている。三つ塚の築造順位は、西塚→中塚→東塚はどうか。いずれにしても、6世紀前半の中に入るものの、約半世紀に亘って営なされたものと推定される。三つ塚の被葬者は大和政権と何らかの関係をもつ宮田周辺を支配した地方権力者であろう。拙稿（三つ塚古墳発掘概報）は聊か修正を要することになったのを付け加えておく。

注1 参考文献

- | | | |
|---------|------|---------------------------|
| 信濃史料刊行会 | 1956 | 信濃考古綜覧上・下 |
| 上伊那郡誌 | 1966 | 上伊那教育会 |
| 大塚初重 | 1967 | 古墳の変遷 日本古考学IV・V |
| 笛沢浩 | 1968 | 信濃における鬼高式土器の開始（信濃20-3） |
| 岩崎卓也 | 1963 | 東日本における土師器の研究 |
| 田辺昭三 | 1966 | 陶邑古窯址群1 |
| 藤森栄一 | 1968 | 信濃古代文化の考古学的試論 |
| 下平秀夫 | 1972 | 伊那市富県阿原古墳発掘報告 長野県考古学会誌14号 |
| 戸沢充則 | 1973 | 岡谷市史上巻 |

カラス林・三つ塚

緊急発掘調査報告書

昭和56年3月20日 印刷

昭和56年3月25日 発行

発行所 長野県上伊那郡宮田村
教育委員会

印刷所 長野県諏訪郡下諏訪町
㈱オノウエ印刷

